

K- 553

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第58集

# 東屋敷館跡

## 発掘調査報告書

平成10年3月  
1998

米沢市教育委員会

# 東屋敷館跡 発掘調査報告書

平成10年3月  
1998

米沢市教育委員会

## 序 文

本報告書は、平成8年度に発掘調査を実施した、「東屋敷館跡」の結果をまとめたものです。

近年、本市におきましては大規模な開発事業が増加しており、本市教育委員会は、埋蔵文化財保護の立場から、開発事業者等との調整を円滑に行いながら発掘調査事業を進めております。

今回の調査は宅地造成に伴うもので、開発業者のご理解を得て緊急発掘調査を実施したものであります。調査によって、中世の建物跡の規模や形態及びその配置、また堀跡の拡張したようすが確認されたことで、中世期の館跡を解明する上で貴重な資料となるものです。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想普及に対する皆様のご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたってご協力を賜りました置賜建設株式会社並びに地元の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成10年3月30日

米沢市教育委員会

教育長 相 田 實

## 例　　言

1 本報告書は、平成8年度に実施した、東屋敷館跡の緊急発掘調査報告書（米沢市埋蔵文化財調査報告書 第58集）である。

2 調査は米沢市教育委員会が実施したものである。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺　跡　名 東屋敷館跡（米沢市遺跡No. A645）

所　在　地 米沢市大字竹井字三俣

調　査　主　体 米沢市教育委員会

調　査　総　括 舟　山　豊　弘（文化課長）

調　査　担　当 手　塚　孝

調　査　主　任 月　山　隆　弘

調　査　參　加　者 穴　沢　茂　雄　五十嵐　三　郎　井　上　吉　栄　井　上　鉄　二

梅　津　治　朗　菊　地　芳　子　木　村　省　三　木　村　芳　浩

黒　沢　富　雄　斎　藤　光　子　佐　藤　裕　子　武　田　房　次　郎

提　昇　昇　中　島　国　雄　松　本　三　郎

事　務　局　長 小　林　伸　一

事　務　局　山　本　卯　平　間　洋　子

4 挿図の縮尺は、各挿図にスケールで示した。挿図内の記号は、B Y－建物跡、T Y－柱跡、P Y－ピット、D Y－土壤、K Y－堀・溝跡、O Y－便所跡、A Z－土器、Z P－木棒洗場遺構、N N－石組遺構を示す。

5 各遺跡の出土遺物は、米沢市埋蔵文化財資料室（米沢市万世町桑山200）に一括保管している。

6 本書の作成、執筆・編集は月山隆弘が行い、全体については手塚 孝が総括した。

7 調査にあたって、置賜建設株式会社、関係各位の協力を得た。記して感謝申し上げます。

# 本文目次

## 序文

## 例言

I 遺跡の概要 .....	1
II 調査の経過 .....	1
III 検出遺構 .....	3
IV 出土遺物 .....	35
V まとめ .....	43
参考文献 .....	43

# 挿図目次

第1図 東屋敷館跡位置図 .....	2
第2図 K Y 1 堀跡・土塁土層断面図 .....	4
第3図 K Y 1 堀跡土層断面図 .....	5
第4図 B Y 1・3 掘立建物跡平面図 .....	7
第5図 B Y 2 掘立建物跡平面図 .....	8
第6図 B Y 4・5 掘立建物跡平面図 .....	9
第7図 B Y 6・7 掘立建物跡平面図 .....	11
第8図 B Y 8・9 掘立建物跡平面図 .....	12
第9図 B Y 10・11 掘立建物跡平面図 .....	13
第10図 B Y 12・13 掘立建物跡平面図 .....	14
第11図 B Y 14・15 掘立建物跡平面図 .....	15
第12図 B Y 16・17 掘立建物跡平面図 .....	16
第13図 B Y 18・19 掘立建物跡平面図 .....	17
第14図 B Y 1～3 掘立建物跡柱穴土層断面図 .....	18
第15図 B Y 4～6 掘立建物跡柱穴土層断面図 .....	19
第16図 B Y 7～9 掘立建物跡柱穴土層断面図 .....	20
第17図 B Y 10～12 掘立建物跡柱穴土層断面図 .....	21
第18図 B Y 13～16 掘立建物跡柱穴土層断面図 .....	22
第19図 B Y 17～19 掘立建物跡柱穴土層断面図 .....	23
第20図 掘立建物跡変容図 (I・II・III期) .....	25

第21図	Z P 182・183 木棒洗場遺構	27
第22図	NN 185 石組遺構・NN 186 池状遺構	28
第23図	O Y 便所跡	29
第24図	出土遺物(1)	32
第25図	出土遺物(2)	33
第26図	出土遺物(3)	34
第27図	出土遺物(4)	35
第28図	出土遺物(5)	36
第29図	出土遺物(6)	37
第30図	出土遺物(7)	38
第31図	中世平城形態分類図	40
第32図	主要平城調査平面図	41
第1表	東屋敷館跡I期建物跡群計測表	6
第2表	東屋敷館跡II期建物跡群計測表	10
第3表	東屋敷館跡III期建物跡群計測表	24
第4表	戸里里窯跡製品出土遺跡一覧表	30
第5表	土堀編年表(試案)	31
第6表	置賜盆地の城館跡編年表	41

## 図版目次

- 第一図版 K Y 1 堀跡・土壘A トレンチ  
 第二図版 A トレンチ土壘  
 第三図版 K Y 1 堀跡  
 第四図版 K Y 1 堀跡  
 第五図版 B Y 2 挖立建物跡・K Y 2 堀跡  
 第六図版 B Y 5・17 挖立建物跡  
 第七図版 柱穴群(1)  
 第八図版 柱穴群(2)  
 第九図版 鍵入式風景、調査風景  
 第十図版 出土遺物(1)  
 第十一図版 出土遺物(2)  
 第十二図版 出土遺物(3)  
 第十三図版 出土遺物(4)





▲東屋敷跡（空中写真）全景

## I 遺跡の概要

本遺跡は、市街地北東約2.5kmの、米沢市大字竹井字三俣に所在している。標高356.6mの戸塚山南東約1kmに位置するもので、標高約243mの平地に立地する。主軸方向を東に傾いた四角形(変形)の館跡である。

北西500mには標高282mの川井館、西側には羽黒神社館、南側700mには小峯神社館等が存在し、館跡が密集しているところである。

今回の調査は、本館跡が宅地造成の計画に係ることから、原因者の依頼を受けた本市教育委員会が、平成7年度に開発予定地に試掘トレンチを4本設定し調査を実施したものである。試掘の結果、中世期に係わる多数の柱跡などが確認されたことにより、関係機関と協議のうえ、平成8年度に発掘調査を実施することに至った。

館跡は、北西側一部に土壘と水堀が残存するだけで、他は破壊されており原形を留めていないが、南側には用水路があり、また東側には排水路があることから、これらの水路は当時の水堀の一部を利用しているものと考えられる。

## II 調査の経過

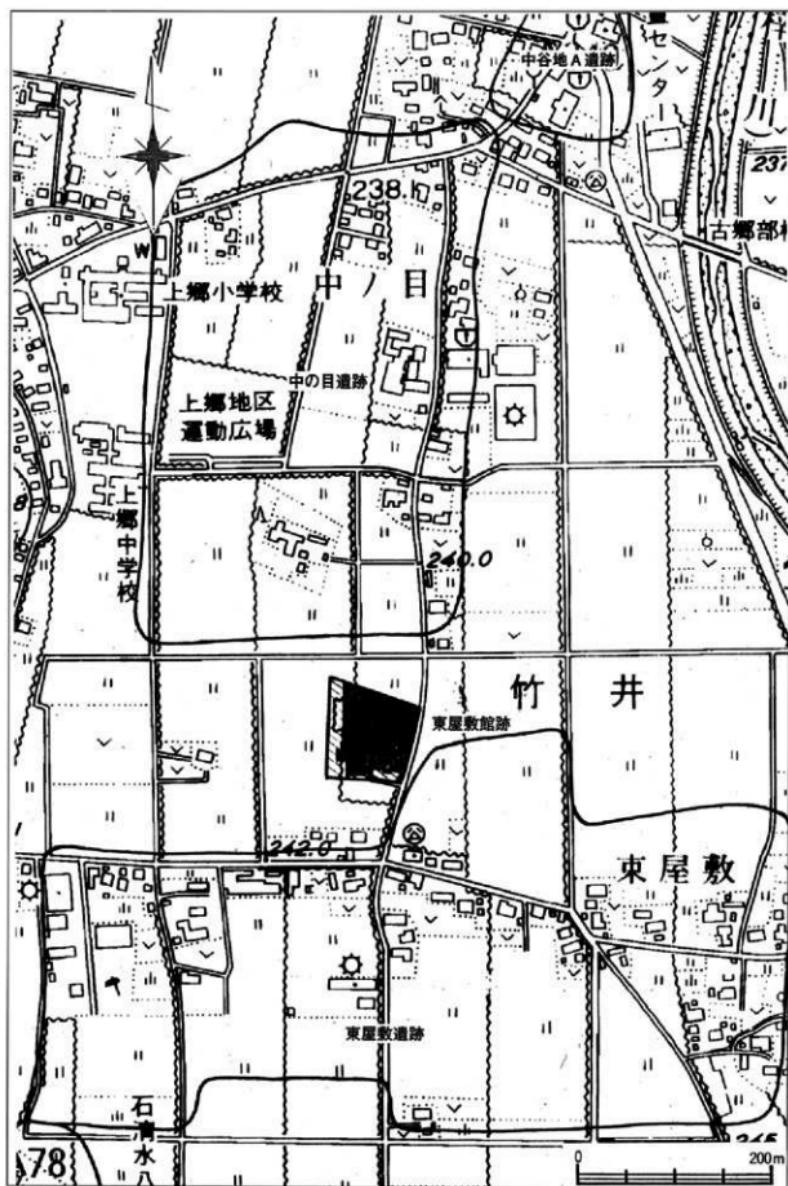
調査は、開発予定地の調査対象面積約6,000m<sup>2</sup>のうちの南側部分を除いた館跡部分と推測される約4,500m<sup>2</sup>を調査の対象とし、平成8年5月7日から開始した。

発掘調査は、残存する土壘と堀跡には手掘りによるトレンチを一部入れた。しかし、その他の部分については、重機で表土剥離を行った。

表土剥離時に、北西側に残存する土壘と水堀付近には、立木の伐採した雜木などが散乱していたことからこれらの焼却及び清掃作業から行った。5月9日から北東側から面整理、20日から遺構の確認のための精査を実施した。この精査で残存する堀跡の内側部分に、南側から東側、北側へと延びる旧堀跡が確認された。この堀跡の掘り下げをaからh調査区へと、南西側から東側へ、また北側へと順次進めた。

次に東側で外側に確認された堀跡gからk調査区を北から南側へと掘り進めた。堀跡の掘り下げ時には、底部付近になると水が浸透してくることから、排水と並行しながらの作業であるため、困難を要した。

6月24日には堀内の遺構の確認をほぼ終了し、掘立建物跡(中世)と推測される柱穴から掘り下げを行い、7月7日で完了。つづいて近世の遺構を掘り下げた。7月8日からは、遺構の掘り下げと並行して平面図作成、19日から堀跡や柱穴の断面図作成、適宜写真撮影を行い、25日に調査区全体の空中写真を撮影し、8月6日で現地調査を終了とした。



第1図 東屋敷館跡位置図

### III 検出された遺構

今回の調査で検出された遺構は、東屋敷館が機能していた中世期、館跡が廃絶した後に館を利用して構築した近世から現代にかけての時期の二者に大別される。ここでは、中世期を中心として遺構の種別に沿って説明を加える。

#### 1. 中世期の遺構

中世に属する遺構は、土塁と水堀で区画された範囲内部にかけて確認されたもので、掘立建物跡を主体に19棟が検出されている。

##### 1) 土塁『第2・3図』

大半が既に失われており、北西の隅、水堀の両側に僅かに当時の痕跡を残している。現存する土塁は、北側の内側で上端の幅が1.1m、高さ0.5～0.8m、西側の上端の幅が1.3m、高さ0.4～0.6m、外側の上端の幅が1.0m、高さ0.5～1.2mといずれも極端に低いことから、後世の段階で削られたものと考えられる。A・B両トレンドで確認したところ、表土剥離後に版築していることが判った。確認した基本層序は4枚であった。基部の状況から内側の土塁は、少なくとも概ね1間半、外側が1間位を呈していたものと推測される。

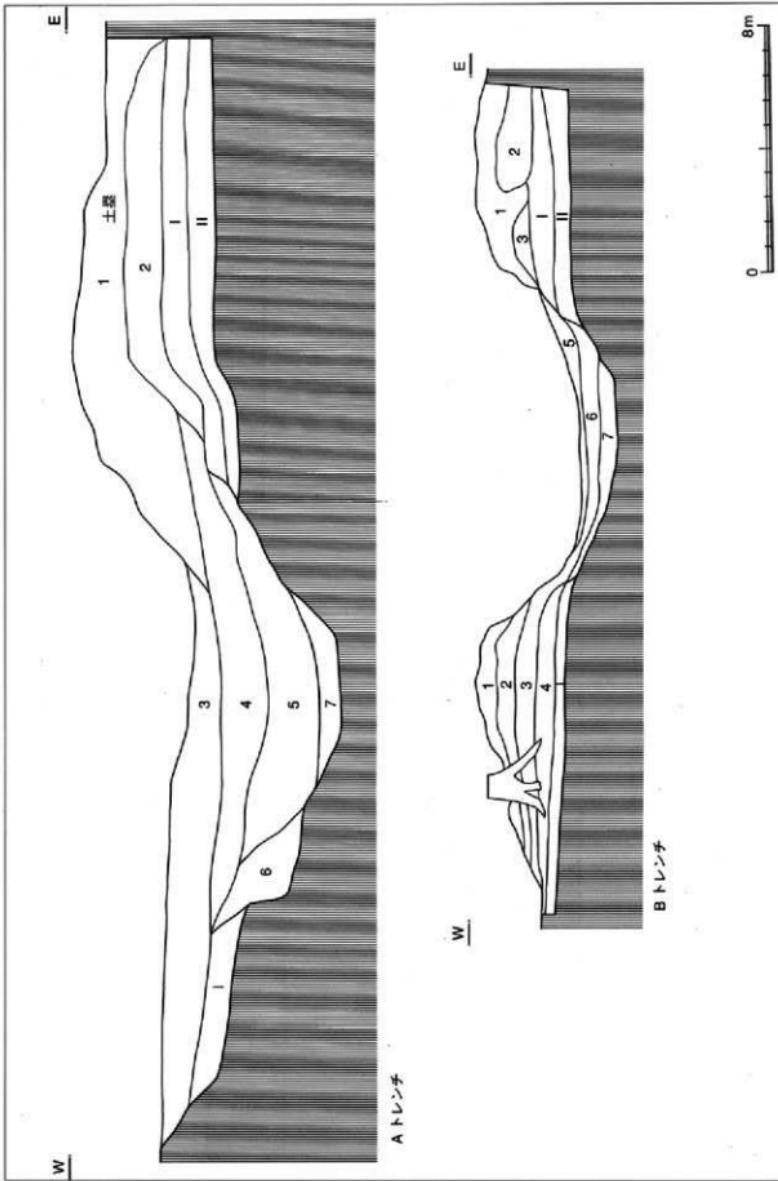
##### 2) 水堀『第2・3図』

2期に亘って認められ、南側の中央の虎口を除けば全周している。1期の堀とした内側で検出されたKY1は、東西方向で北面が55m、南面が47mと南面が約7mほど短くなっている。南北方向としては、西面が55m、東面が53mと東面が若干短くなっているがほぼ継長の方形にちかい。堀幅は、北側が3.2mと極端に狭い以外は、4.0～4.5mを有しており、確認面からの深さは0.8～1.2mを測る。

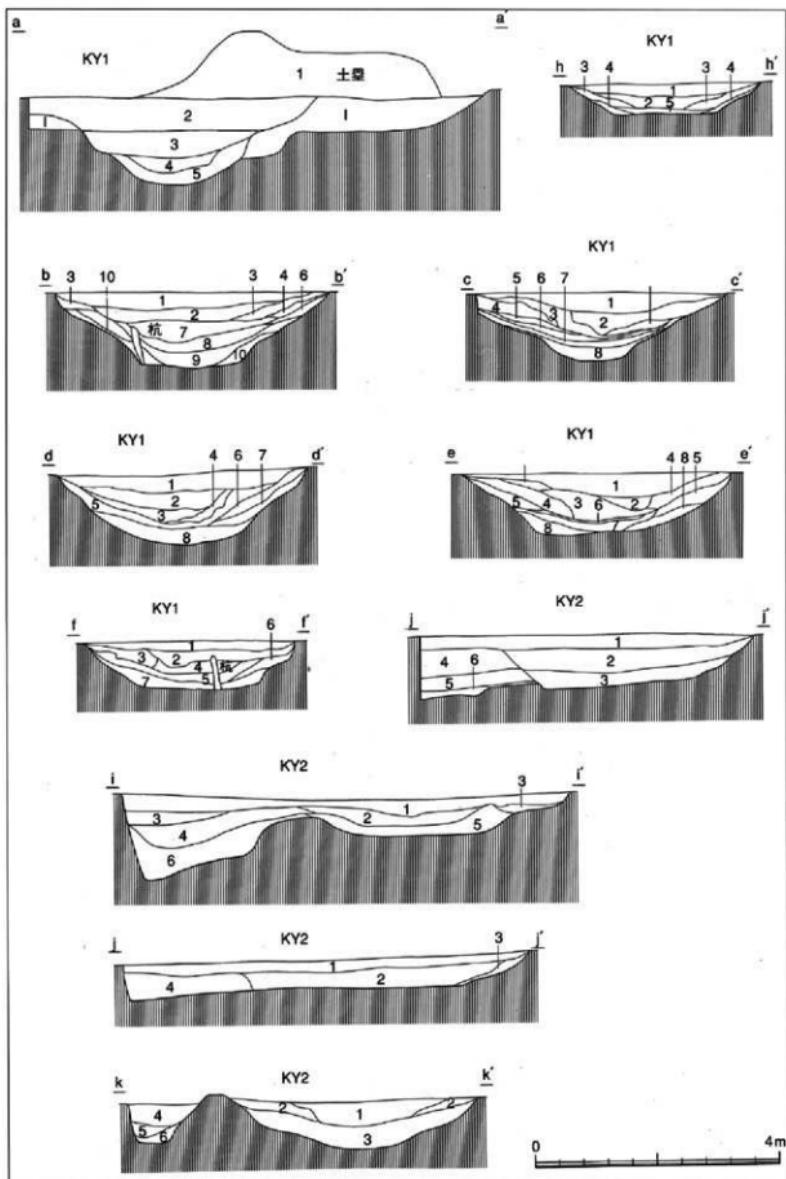
一方、後で詳しく触れるが、Ⅲ期の建物の段階で拡張した外側に検出されたKY2は、南側に7m、東側に8m延長したことと、北面が60m、南面が5mとなり、平面形状は台形を示すことになる。堀幅は、南側の幅が1.2m、北側の平均が2.5mと東西面が広く、南北面が狭いといった特徴を示す。確認面からの深さは、南堀が1.7～2.0m、東3.5m、西2m、北側が3mを測る。堀の断面形状は全て箱堀で、土層観察によるとKY2は自然堆積を示すが、KY1の東側と南側の大半は人工堆積を示していたことで、KY2を拡張した際に掘り込んだ土砂を埋め戻したものと考えられる。

##### 3) 建物跡『第4～6図』

ほぼ1期の堀内部を中心として、中央より南寄りにかけて検出されている。柱穴の切り合い關係の吟味からⅢ期に亘る19棟の建物跡と、組み合わせの不可能な柱穴群467基が検出されている。柱穴の多くには、柱根を残すものも含まれている。柱穴の底部の一部には、柱を固定するために工夫したと推測される、細い棒状の雜木を並列した遺構（一種の地業）も確認されており、他に



第2図 KY1堀跡・土壠断面図



第3図 KY1・KY2 堀跡土層断面図

例がないことからここでは細木根固と呼称することにした。以下、簡単に各時期ごとに要約して説明を加える。

#### ● I期の建物群『第4～6図』

東西長さの3間×6間と推測されるB Y 2の母屋を中心として、北に2間～3間のB Y 1、南東に2間×3間のB Y 3、ほぼ軸を同じくした2間～3間×4間と推測されるB Y 4と虎口東よりに位置する1間×1間の櫓B Y 5の5棟で構成する。いずれの柱も後の建替えや後世の搅乱で不明瞭なものが多く、特にB Y 4の建物に関しては、存在そのものが疑問である。

柱穴の状況は、B Y 5の櫓跡が60cm～80cm、深さ40cm～50cmの掘り方と30cm～40cmの柱痕跡が明瞭に存在する。B Y 2が掘り方が30cm～50cm、25cm前後の柱根を残すものが含まれているが、他の柱に関しては、掘り方が25cm～35cm前後、深さが30cm～40cmで柱痕跡も15cm前後と小規模なものが主体であった。各建物跡の計測は次の通りとなる。

第1表 東屋敷館跡 II期建物跡群計測表

(単位:m)

建物	桁 行	梁 行	備 考
B Y 1	南北2間(1.9×2.0)	東西3間(2.2×?×?)	
B Y 2	南北3間(2.0×?×?)	東西6間(2.0×?×?×?×?×18)	北側に3間の目隠を伴う。
B Y 3	南北2間(2.0×2.0)	東西3間(2.0×2.2×2.0)	
B Y 4	南北2間(3.5×?)	東西4間(?×2.9×?×?)	
B Y 5	南北1間(2.4)	東西1間(2.0)	櫓台

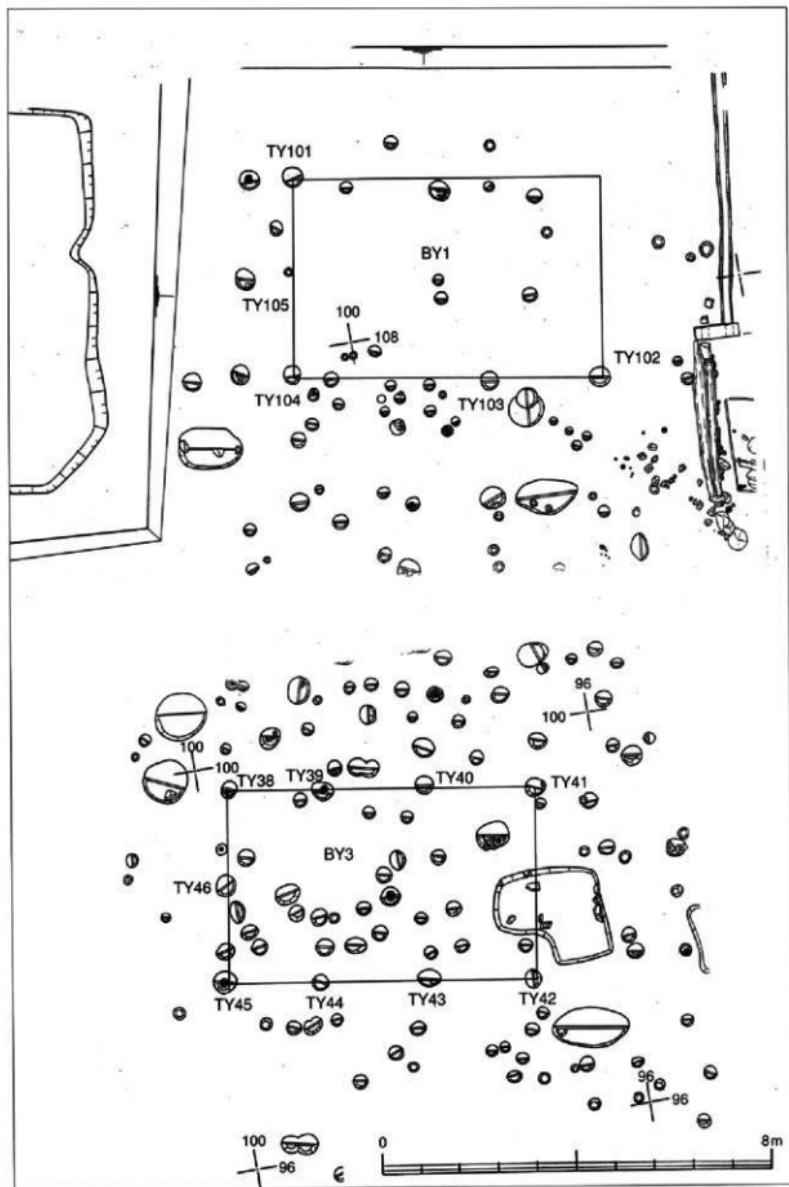
#### ● II期の建物群『第7～9図』

主体建物となる母屋を中心とし、後建物と前面左右の建物に櫓を配した配置が基本となっている。B Y 7の母屋は桁行3間、梁行6間の東西長の建物で、中央を間仕切りをもつた特徴とする。北側の納屋跡と推測されるB Y 6は2間×3間の東西長の建物で、母屋の南東部から虎口方向には軸を同じくする3間×4間のB Y 8、方形プランを呈す3間×3間のB Y 9、さらに2間×3間と推測されるB Y 10の計3棟が連立している。

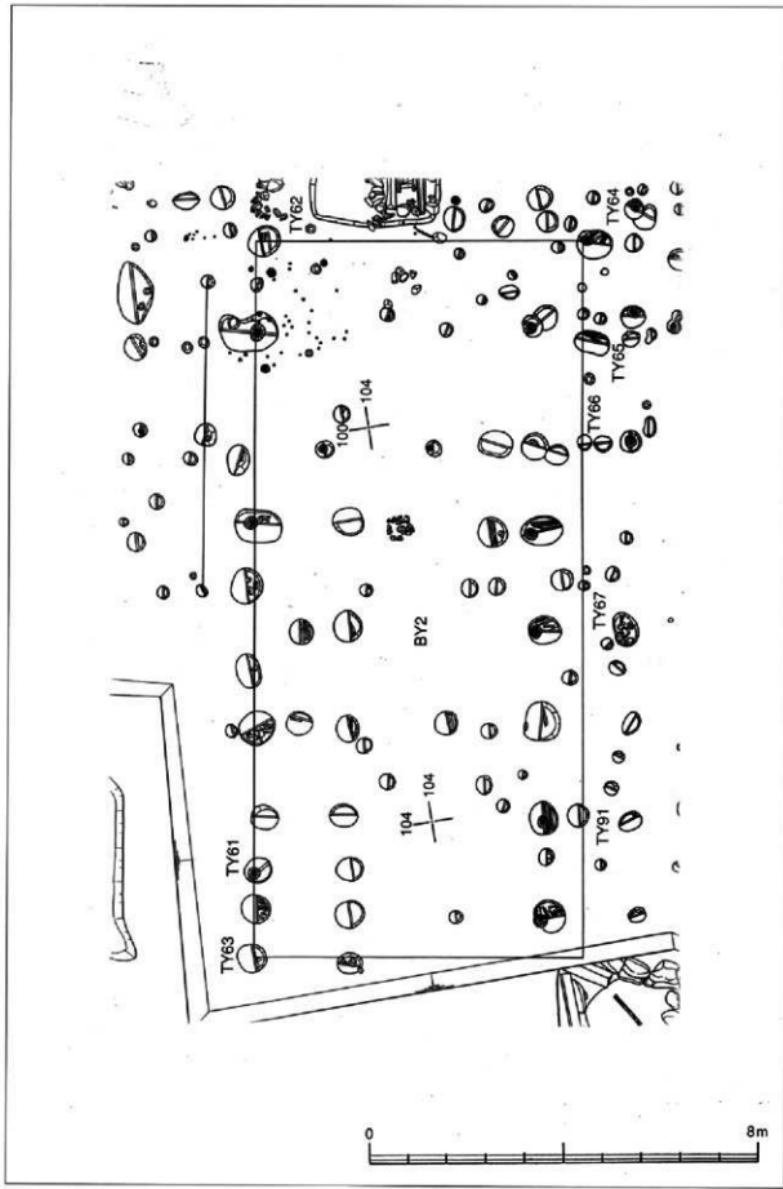
一方、II期には西側にも建物が存在するようになる。B Y 8正面の西側に構築されたB Y 11がそれで、2間×3間の小規模な納屋風の建物であり、I期から継続して置かれた櫓跡のB Y 5を含めた7棟で建物群を構成する。

建物の柱穴の状況は、B Y 6・7・11の3棟は比較的の残りは良好であるが、他の建物に関してはいずれも不明瞭で、後の建替えによる影響や後世の搅乱で破壊されているものとみられる。

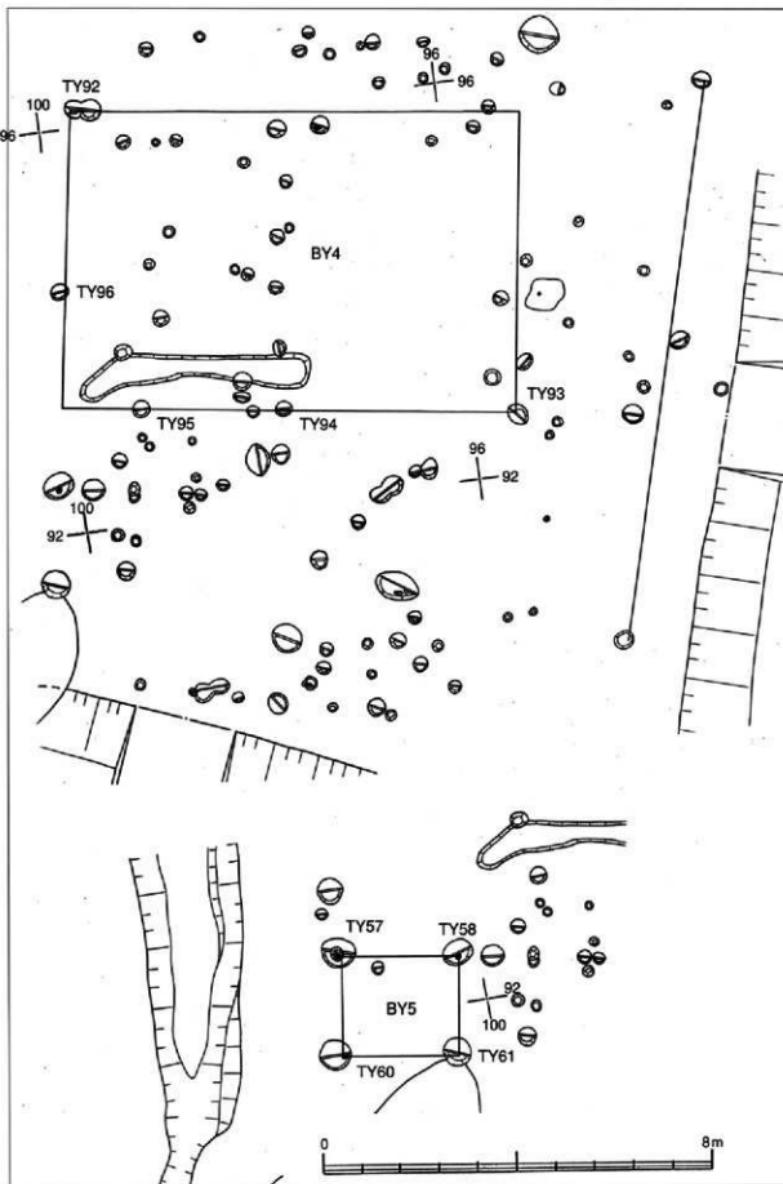
柱穴の状況は、B Y 7が40cm～80cmの楕円形の掘り方を示し、深さ30cm～50cmの底面に細木根固を施すのを特徴とし、内部に20cm～40cmの柱痕跡が明瞭に存在する。B Y 6に関しては、掘り方が30cm～50cmの円形で、25cm前後の柱根を残すものが含まれている。B Y 11は一部切り合ひ関係を示すが、掘り方は概ね37cm～49cmの楕円形に25cm前後の柱根を残すものが含まれている。他の建物群に関しては、掘り方が25cm～45cm前後の円形から楕円形状を有するものが



第4図 BY 1・3掘立建物跡平面図



第5図 BY2掘立建物跡平面図



第6図 BY 4・5掘立建物跡平面図

多く、深さが30cm～40cm位を平均に、柱痕跡も15cm前後と小規模なものが大半であった。各建物跡の計測は次の通りとなる。

第2表 東屋敷館跡Ⅱ期建物跡群計測表

(単位:m)

建物	桁行	梁行	
B Y 5	南北1間(2.4)	東西1間(2.0)	槽台
B Y 6	南北2間(2.0×2.0)	東西3間(2.0×2.0×1.9)	
B Y 7	南北3間(1.7×?×?)	東西6間(2.4×2.4×2.7×2.5×2.0×2.7)	中央に間仕切り
B Y 8	南北3間(5.8×5.0×5.0)	東西4間(4.8×5.4×?×6.0)	
B Y 9	南北3間?(2.0×?×?)	東西3間?(?×2.5×?)	
B Y 10	南北2間(2.0×?)	東西3間?(2.0×?×?)	
B Y 11	南北2間(2.0×2.0)	東西3間(2.0×2.0×2.0)	

●Ⅲ期の建物群『第10～13図』

母屋となるB Y 12を中心に、後詰の北建物と東建物群3棟の他に、西側にも建物群を3棟を配置した8棟の建物群で構成するようになる。東側に付随する施設のA Y 548は目隠しとみられる。特に注目したいのはB Y 12の建物で、桁行3間×梁行6間となっており、桁行、梁行方向の間尺が1.8～2.0mとほぼ一定の長さを呈しているのを特徴とする。さらに建物の周囲には庇を伴っている。庇は、西面が未調査であるため明確にできなかったが、ほぼ全周する可能性があり、南に約6尺、東面と北面がそれぞれ約8尺の間隔を保っている。後建物となるB Y 18は、3間?×4間?と推測されるもので納屋とみられる。

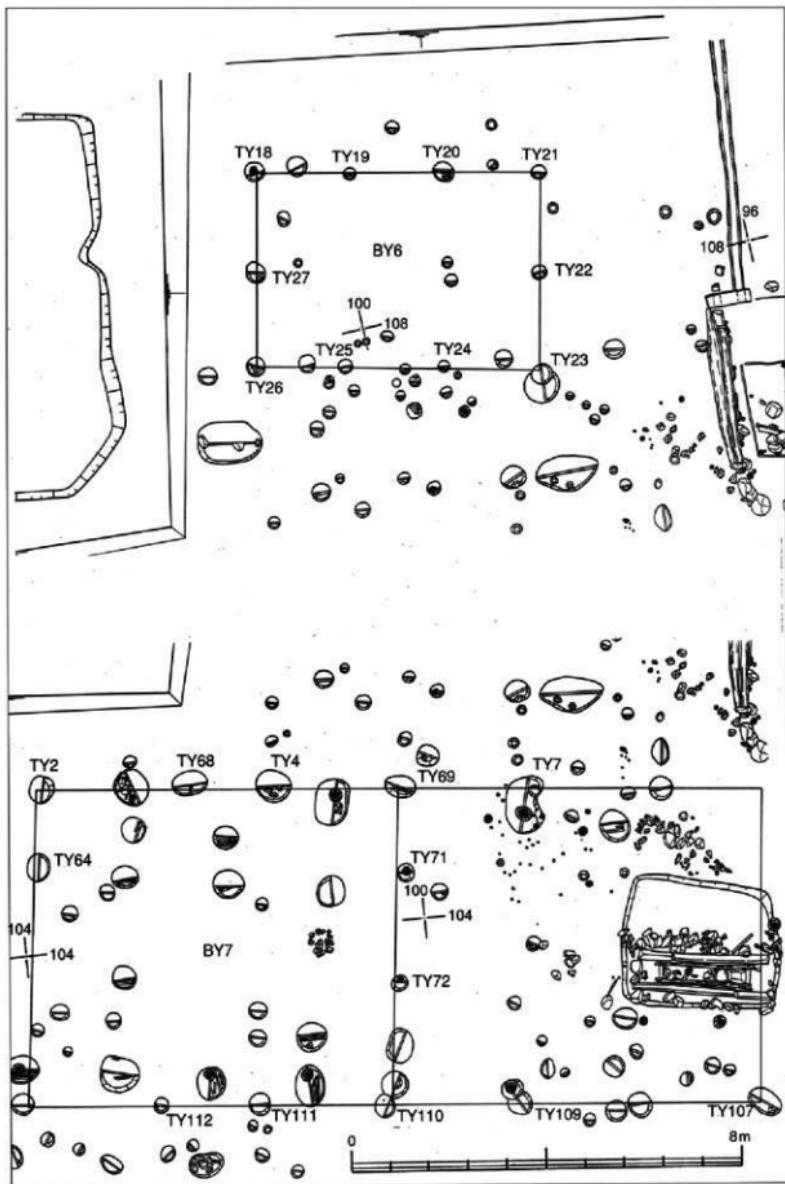
東側に存在する建物群は3棟で、B Y 13が2間×4間、B Y 14が1間×3間、B Y 15が2間×3間と推測される建物で、B Y 14とした細長い施設に関しては厩と推測される。

西側の建物群も3棟で配置されている。B Y 17は東西の3面に庇を有する建物で2間×3間を呈することから倉庫跡の可能性がある。B Y 16は3間×3間の小規模な建物で、納屋とみられる。最後に、唯一南北方向に主軸長をもつ4間×3間のB Y 19は、最初の水堀となるK Y 1を埋めた後に構築したもので、K Y 1を廃絶し、K Y 2を拡張した時期を示すものとして注意される。おそらく、Ⅰ期の建物群を構築する段階で埋め戻されたと考えられる。

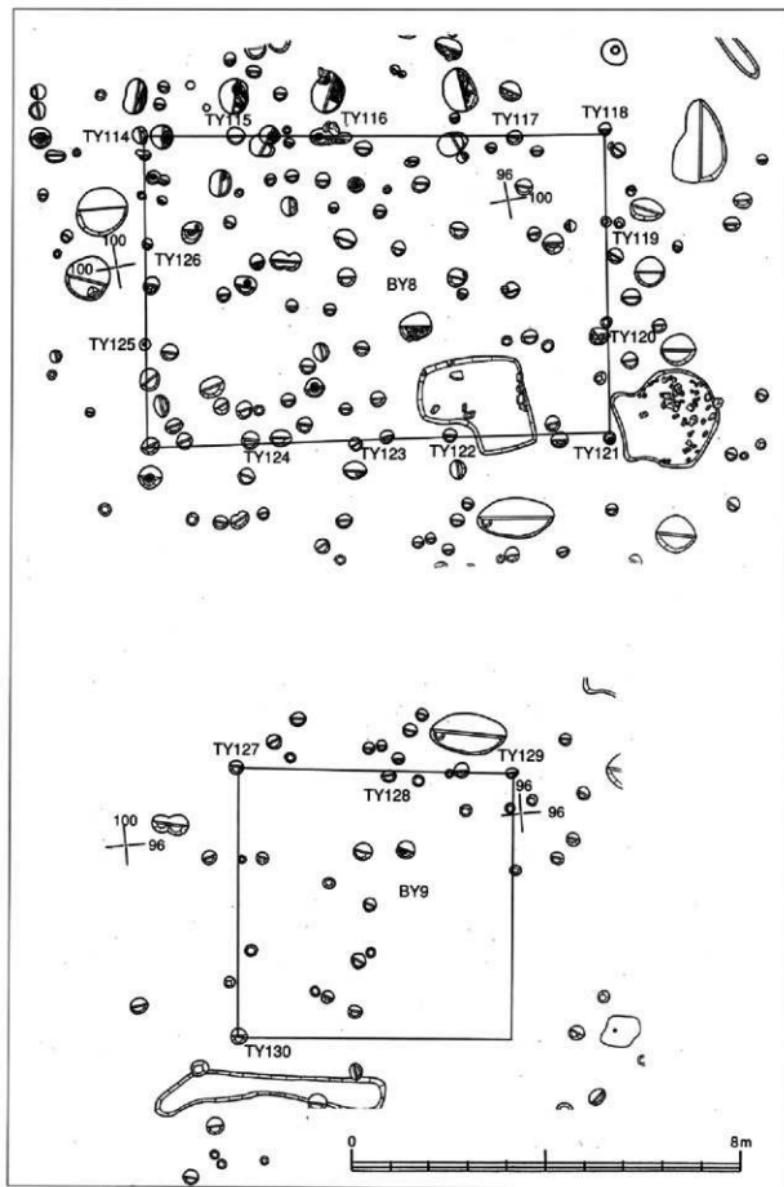
建物の柱穴の状況は、B Y 6・7・11の3棟は比較的残りは良好であるが、他の建物に関してはいずれも不明瞭で、後の建替えによる影響や後世の搅乱で破壊されているものが多い。

柱穴の状況は、B Y 12・B Y 13・B Y 17が比較的良好に確認することができる。先の母屋となるB Y 12は、45cm～80cmの楕円形及び円形の一際大きな掘り方を有し、深さが30cm～50cmの底部には細木根固を施すのを特徴としている。柱穴の大半には柱根が認められ、約30前後の太さを示していた。B Y 13は一部切り合い関係を示すが、掘り方は概ね30cm～45cmの円形に掘り込んでいる。B Y 17は30cm～50cmの楕円形の掘り方で、約30cmの深さに掘り込んでいる。

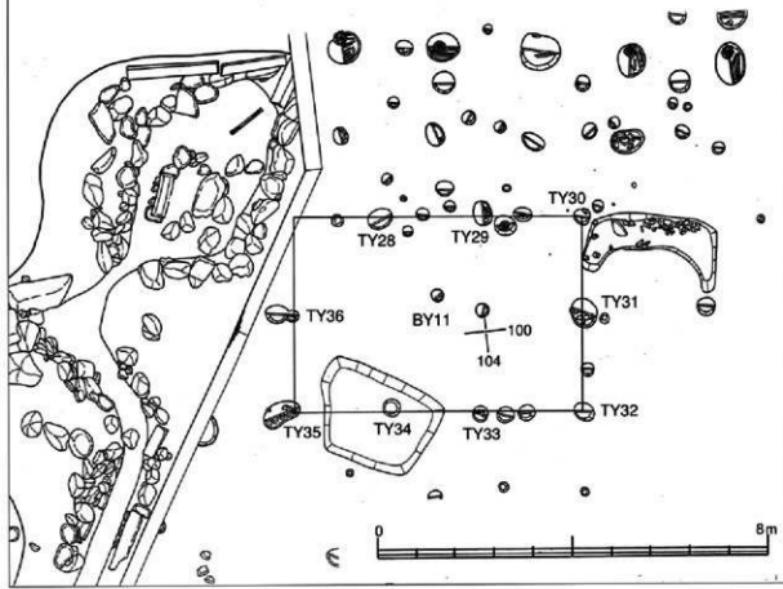
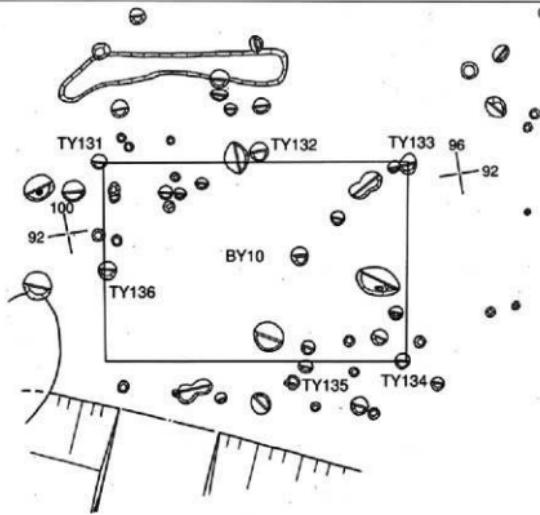
他の建物跡に関しては、掘り方が25cm～45cm前後の円形から楕円形状を示すものが多く、深



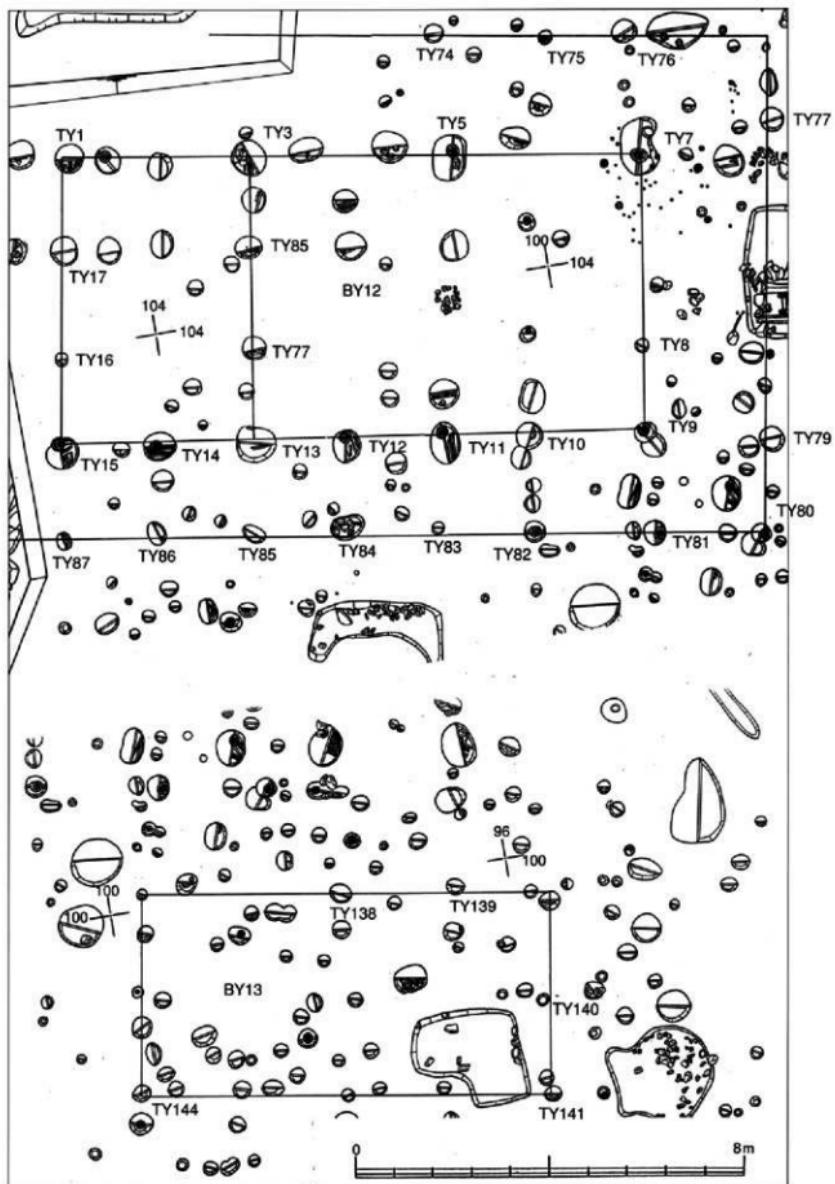
第7図 BY 6・7 堀立建物跡平面図



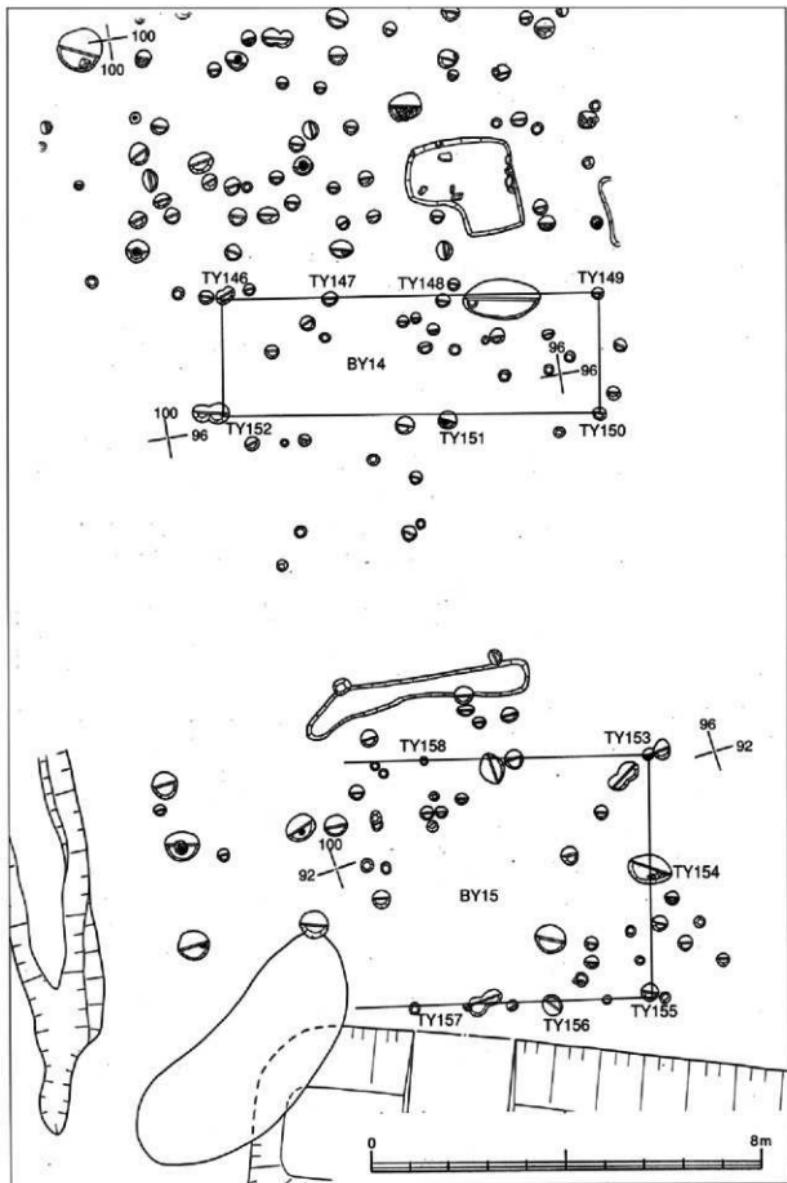
第8図 BY8・9掘立建物跡平面図



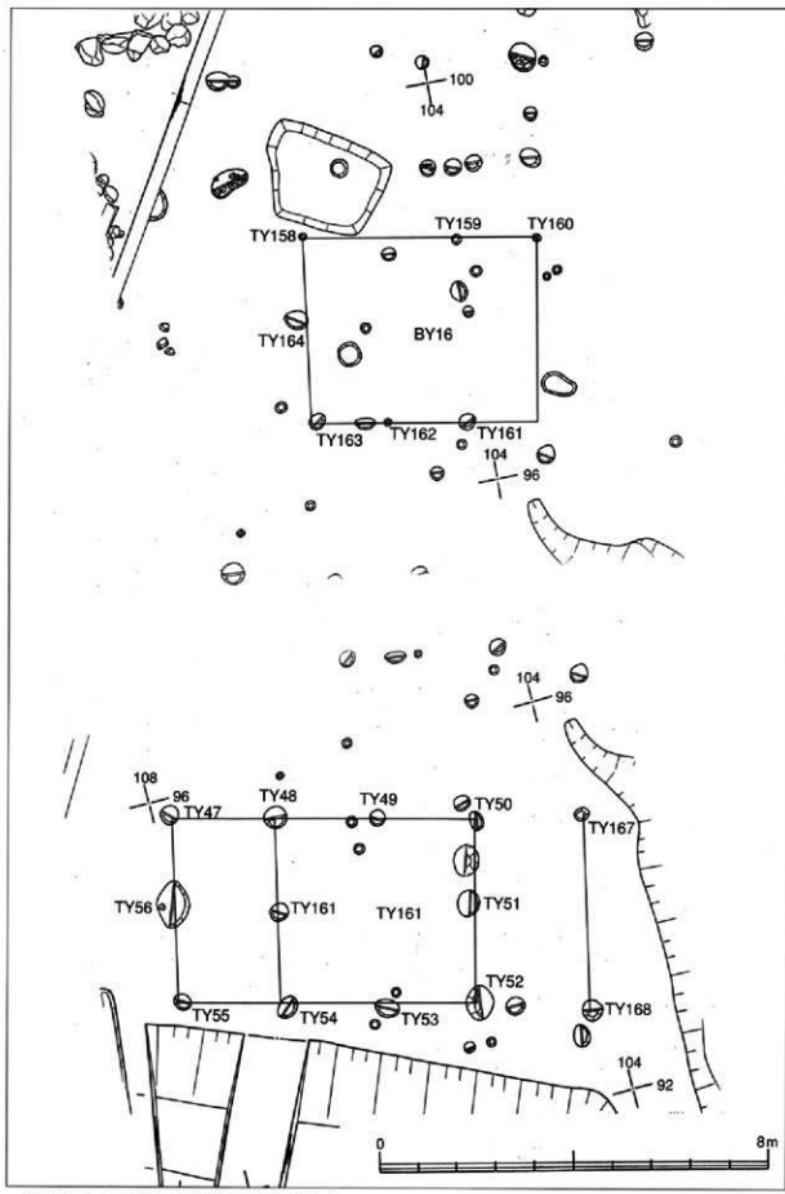
第9図 BY 10・11 堀立建物跡平面図



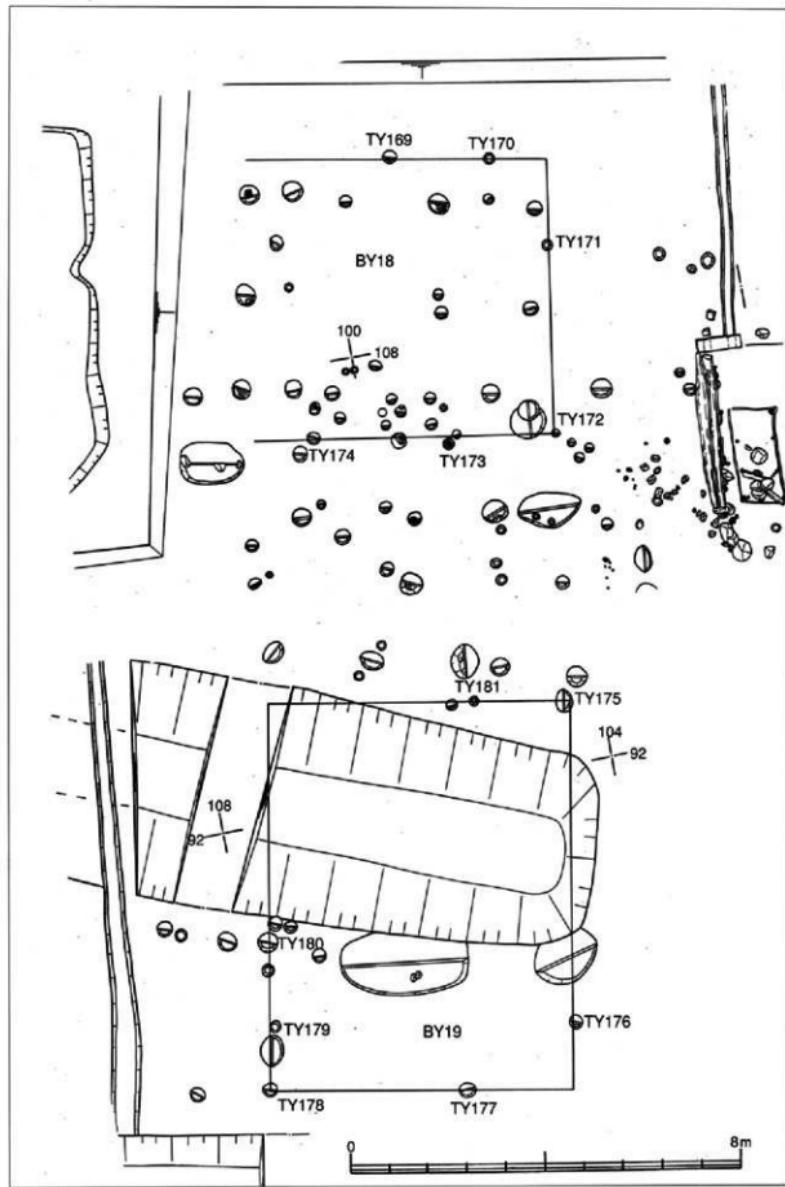
第10図 BY 12・13掘立建物跡平面図



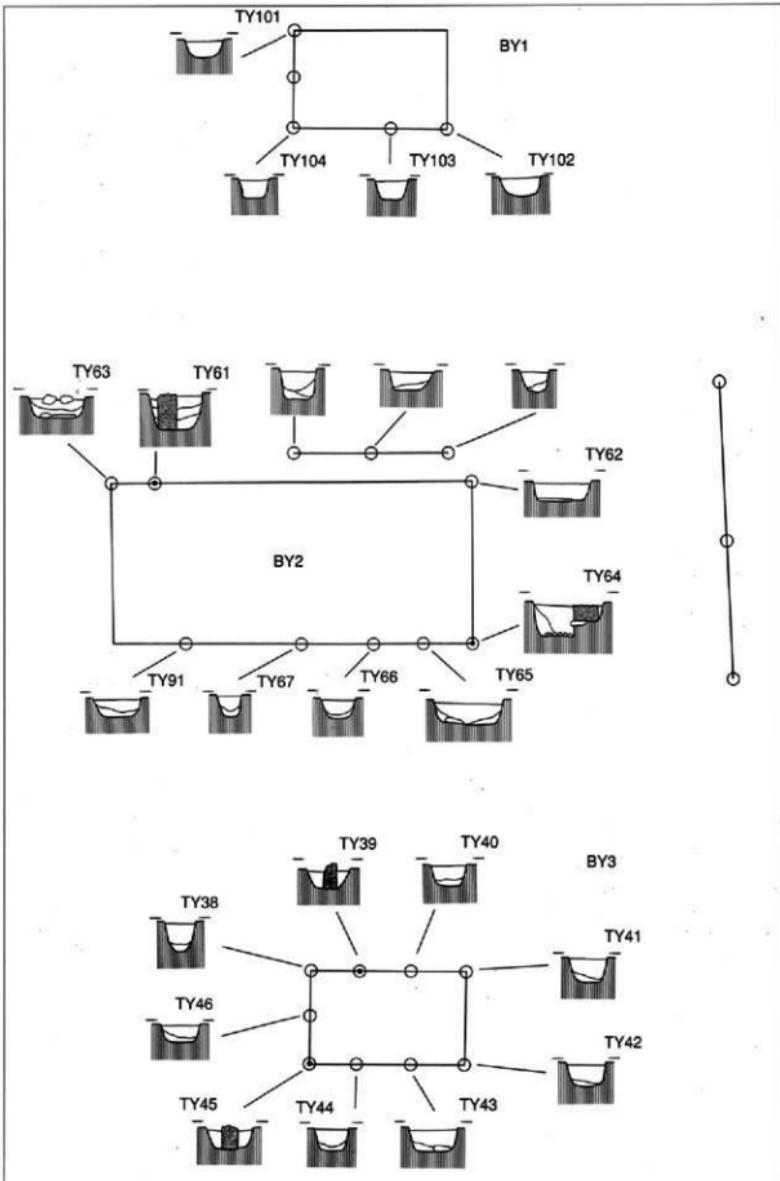
第11図 BY14・15 建立物跡平面図



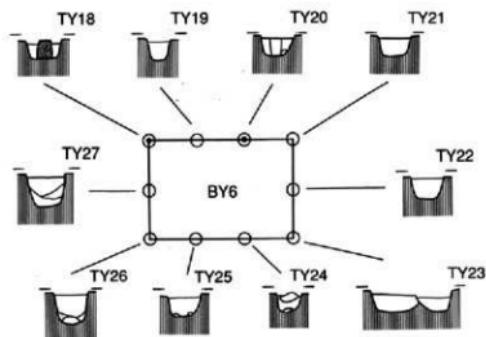
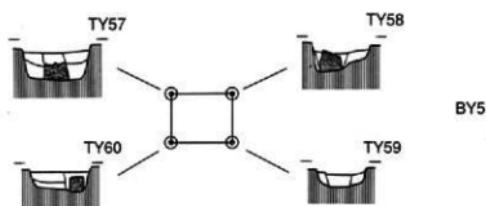
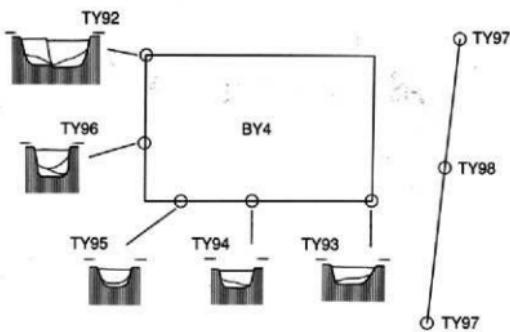
### 第12図 BY 16・17掘立建物跡平面図



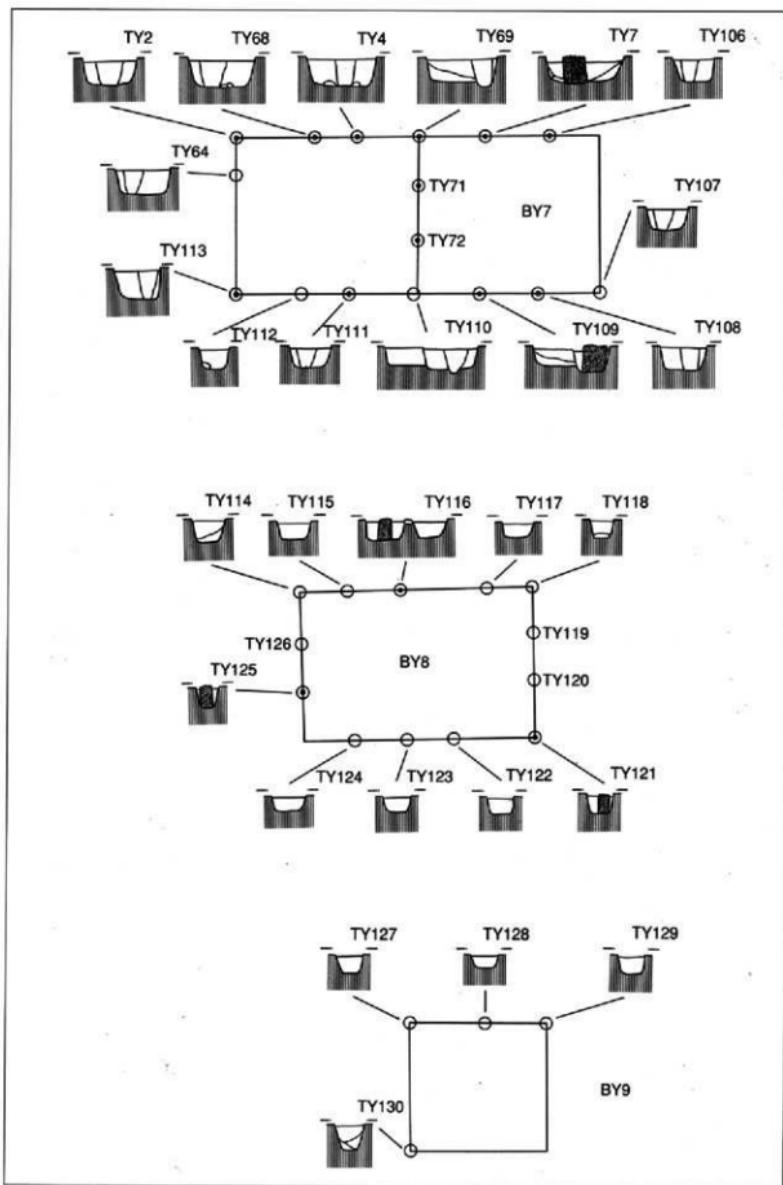
第13図 BY 18・19 据立建物跡平面図



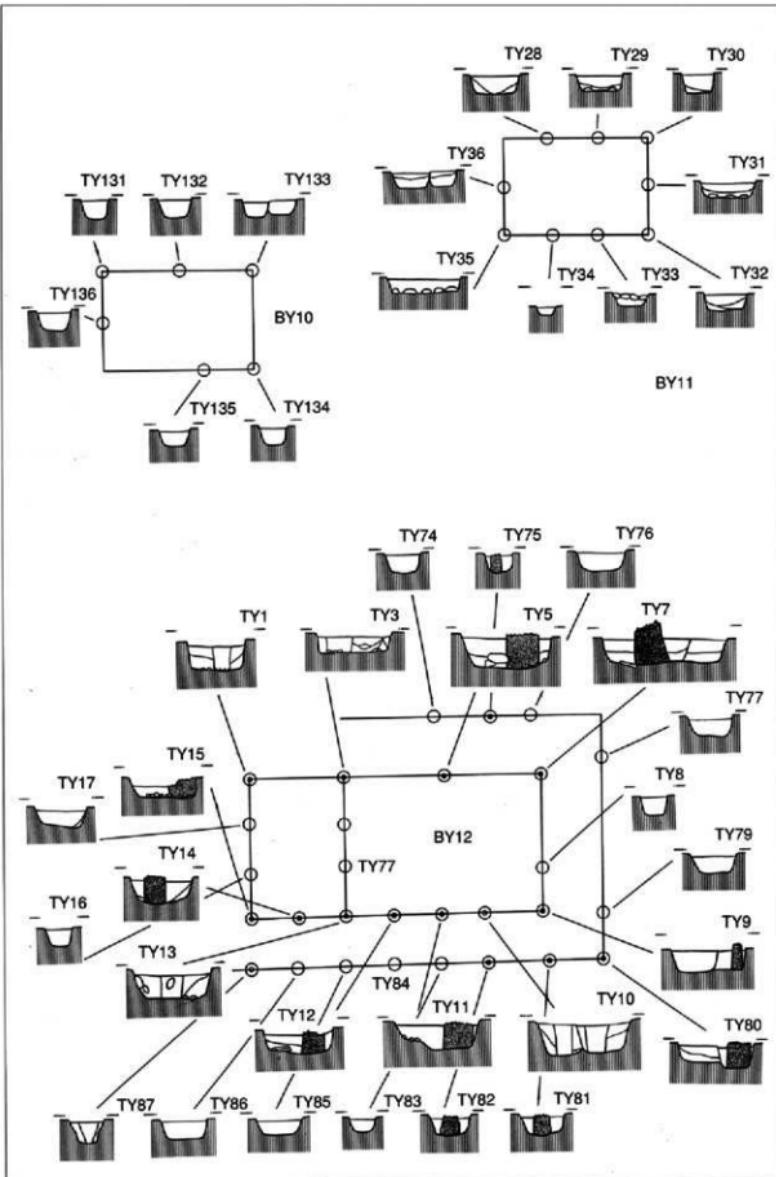
第14図 BY 1～3 据立建物跡柱穴土層断面図



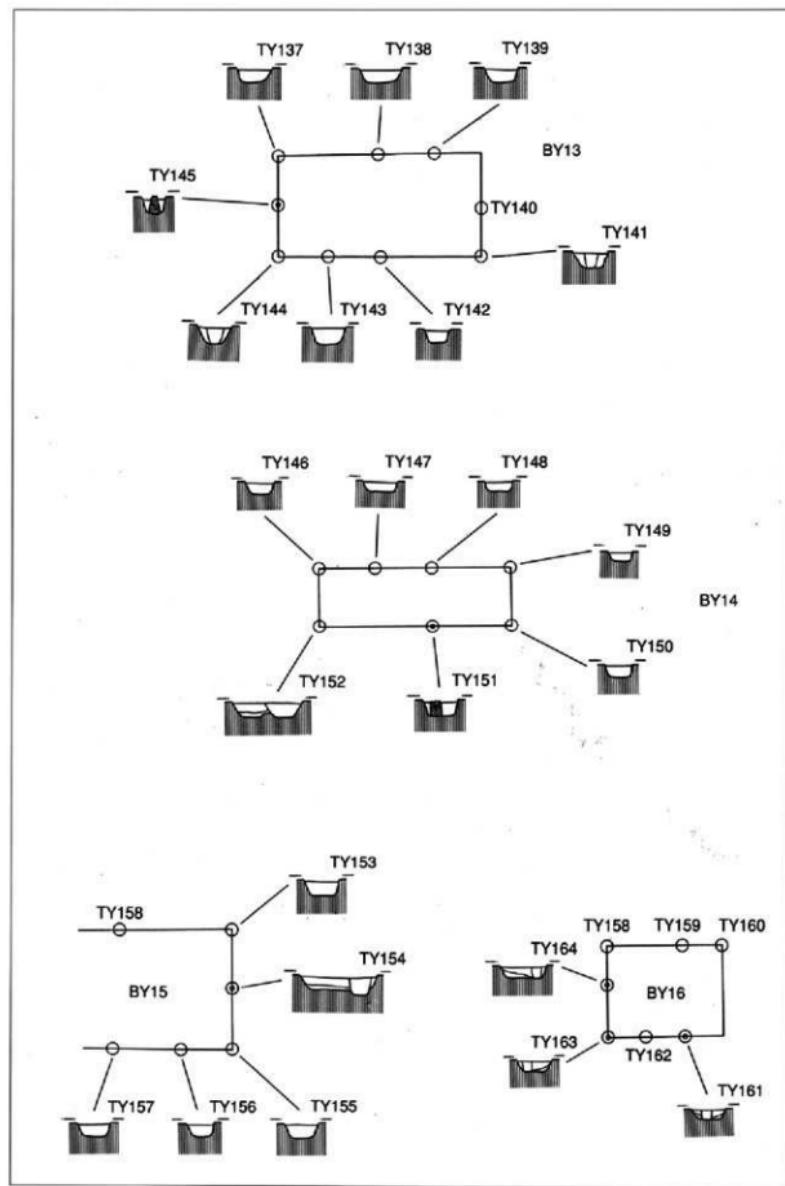
第15図 BY 4～6掘立建物跡柱穴土層断面図



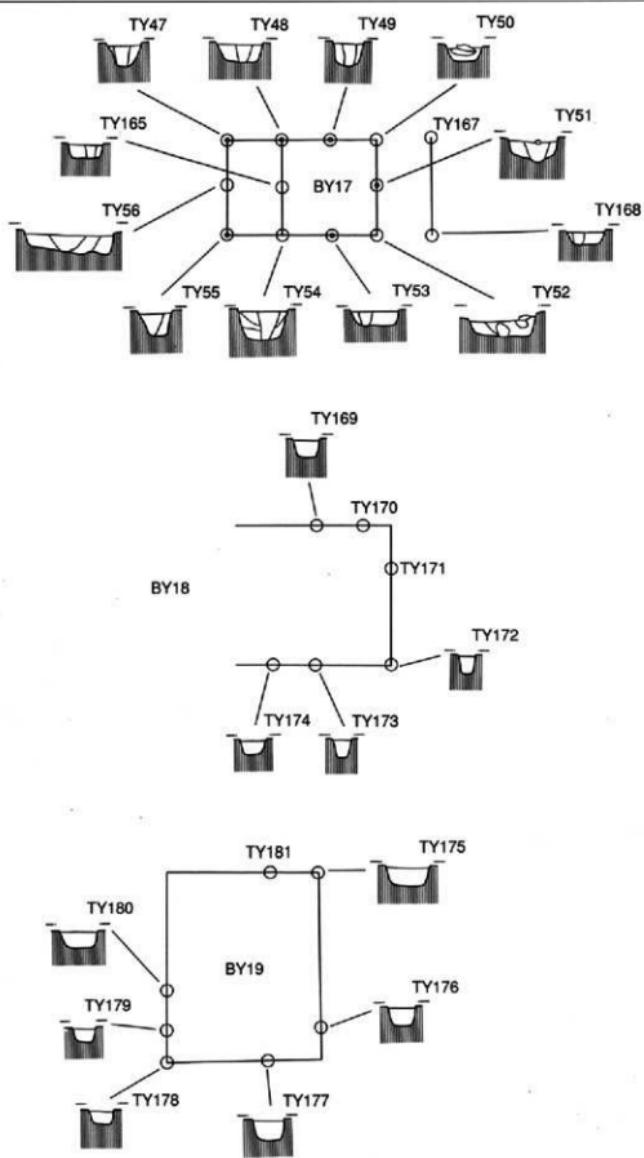
第16図 BY 7～9 据立建物跡柱穴土層断面図



第17図 BY 10～12 据立建物跡柱穴土層断面図



第18図 B Y 13～16 堀立建物跡柱穴土層断面図



第19図 BY 17～19 据立建物跡柱穴土層断面図

さが30cm～40cm位を平均に、柱痕跡も15cm前後と小規模なものが大半であった。各建物跡の計測は次の通りとなる。

第3表 東屋敷館後Ⅲ期建物跡群計測表

(単位:m)

建物	桁 行	梁 行	備 考
B Y12	南北3間(1.8×2.0×1.8)	東西6間(2.2×1.8×2.0×1.8×2.0×2.0)	4面庇?
B Y13	南北2間(2.0×2.0)	東西4間(2.2×2.0×2.0×2.0)	
B Y14	南北1間(2.3)	東西3間(3.0×2.3×2.2)	
B Y15	南北2間(2.5×2.3)	東西3間?(2.0×2.8×?)	
B Y16	南北3間?(1.9×1.8)	東西3間?(?×1.6×1.5)	
B Y17	南北2間(2.0×1.8)	東西3間(2.0×2.0×2.0)	間仕切り
B Y18	南北3間?(?×?×?)	東西3間?(2.0×2.8×?)	
B Y19	南北4間?(1.3×1.6×?×?)	東西3間?(1.8×?×?)	

## 2. 近世の遺構〔第21～23図〕

近世の遺構としては、中世の建物群が集中するG 96～111～92～104の範囲にかけて分布している。主要な遺構としては、桶を利用した便所後基、転用した柱を用いて方形に配置する木枠洗場遺構2基、池状遺構に不明落込遺構16基の計18基が近世に伴う施設である。ただし、これらの多くは、近代まで継続して使用されたものもあり、明確に区分することは不可能である。このことを前提にして、各遺構について概要を記す。

### 1) 便所後〔第23図〕

大半がKY1の水堀に接した東側に集中しており、9基が検出されている。全て便所と推測される遺構は、桶を地面に直接埋設したものであり、ほぼ円形の掘り方をもつ。桶は基本的に円形と梢円形に区分され、前者の円形を有する桶は、最大で170cm～250cmと後者に比べて大きいのが特徴で、OY195～OY197の3基が存在する。後者の男系状を示した桶は、130cm～170cmをなし、前者の桶と共存するといった特徴をなす。

G 100～96から検出された4基の便所跡は、切り合い関係からOY191とOY192を埋戻した後にOY193とOY194を改めて構築したことが判った。また、G 105～96の桶もOY195の後にOY196を設置したものである。OY199はKY1の内部から検出されたもので、KY1としての機能が失われた以降に設置されたことはいうまでもない。これらの便所は、当初から桶を埋設するのか、それとも桶を転用して埋設するのかの吟味は難しいが、ある程度便所として使用する期間を経ると埋め戻し、改めて設置する方法をとっていることは確かである。同様な施設としては、米沢城東二の丸跡に例がある。内部からの遺物としては、僅かに近世の陶磁器が出土したにすぎない。

第20図 東屋敷船跡建物跡変容図（I～III期）



#### 2) 木枠洗場遺構『第21図』

大小2基が北側中央に存在している。近世の建物に付随する流し場跡で、建物（おおい）の存在は認められないが、この場所にかつての庫裡（台所）が存在していたものと推測される。

#### ● Z P 182『第21図』

ほぼ方形を示すZ P 182は、柱を転用した木材を30cmほど掘り下げた内側に凝灰岩の転用切石と併用した施設である。木材や切石は縦に打ち込んだ杭によって固定され、西側に長径2m、短径1m、深さ70cmの長方形の木組の箱状に施した流し場が設置されている。さらに、流し場から幅25cm、深さ20cmの浅い排水用の溝K Y 549が北西隅からまっすぐに北方向に延びている。内部からは、近世から近代にかけての陶磁器類が13点出土している。遺物の大半は、茶碗や鉢・皿といった雑器が主流で、18世紀後半～19世紀前半に求められる在地窯を主体とした伊万里系統の陶器類、隣県の相馬焼、本郷焼、山形平清水焼に地元の成島焼などが乱雜に含まれており計24点が出土している。

#### ● Z P 183『第21図』

東西3.4m×南北2.5m方形の落ち込みの南側を中心として、転用柱と板材を杭で固定した施設で、周囲を礫や板で整えてある。流し場となる空間は、東西1.7m、幅70cm、深さ50cmを測る。内部からは、17世紀後半～19世紀前半の美濃系に属する擂り鉢や古伊万里の陶磁器類、その他、在地窯を主体とした伊万里系統の磁器類等31点が出土している。

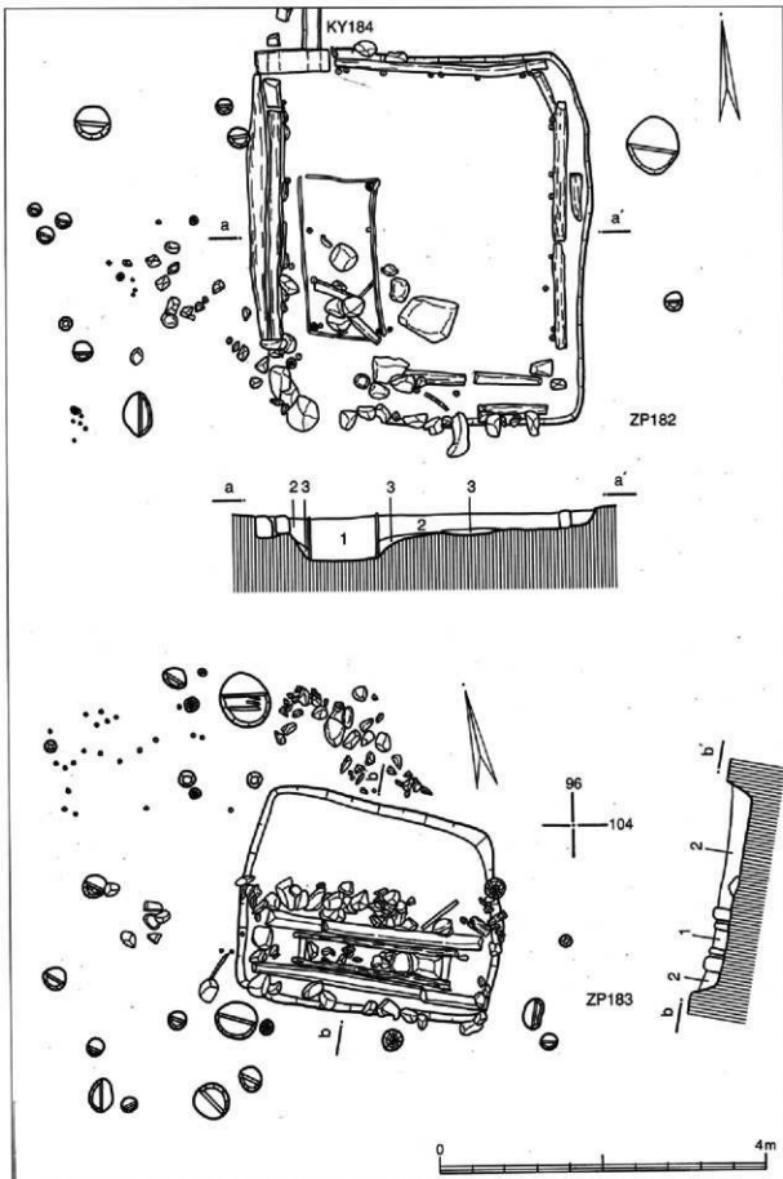
#### 3) 石組遺構『第22図』

NN 185とNN 186・NN 550の3基がある。先のNNは、G 108～104よりに検出された池状の落ち込みと、その西側の土壘上に組合せた自然礫の石組遺構で、後述するNN 185の池に切石の桶によって接続している。南側には入り水を引き込む溝が伴うことから「夏川」と「坪山」を組み合わせた施設とみられ、少なくとも近代まで機能していたものと推測される。

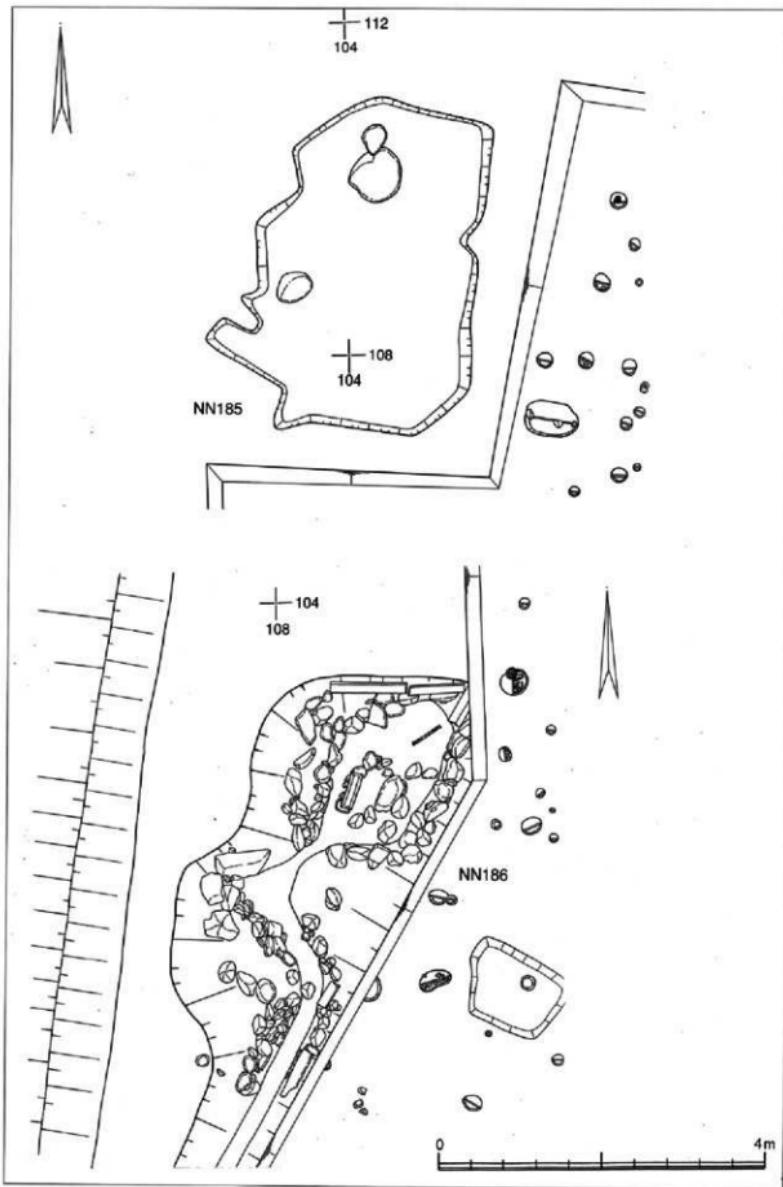
後者の石組み遺構は、NN 185が不整の方形、NN 550が不整の楕円形で30cm前後の浅い掘り込みに乱雜に礫が散在するので、意図的な配置は見い出せない。

#### 4) 池状遺構『第22図』

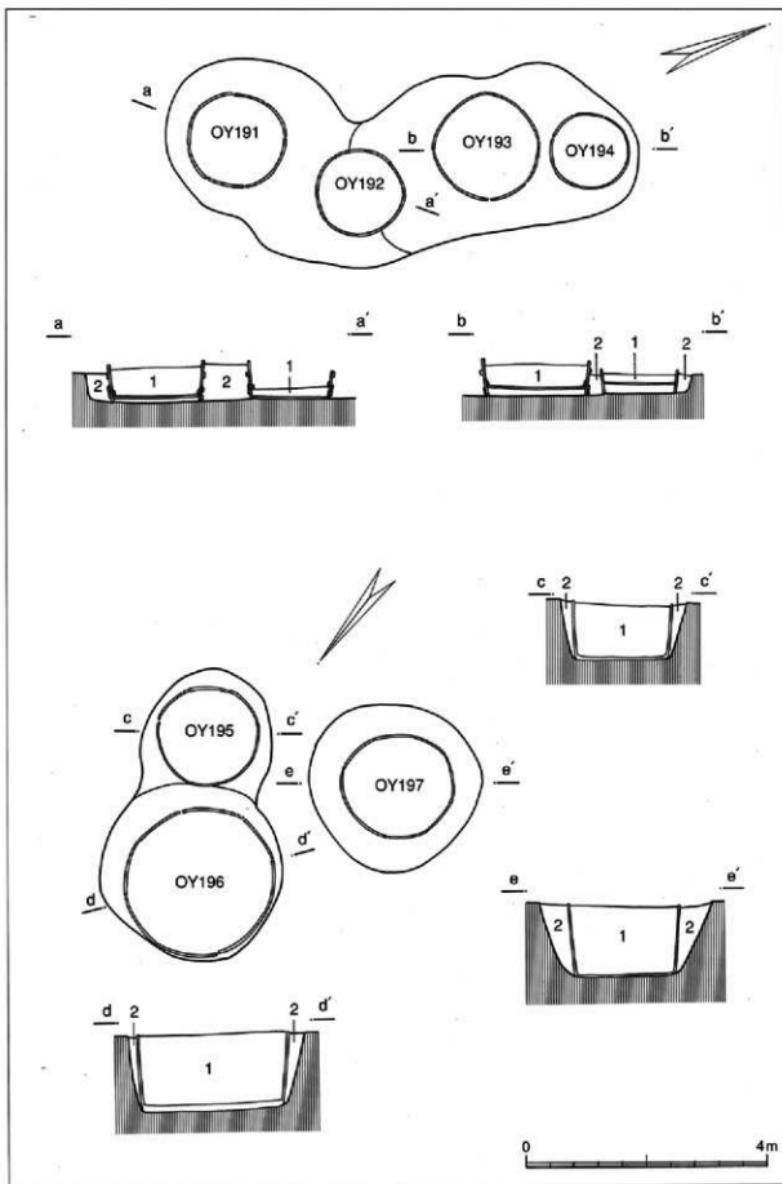
明らかに近代の池である。南北約8m、東西約6mの池内部からは近代の陶磁器片が数点と祠と推測される石塔の一部が検出されている。



第21図 ZP 182・183 木枠洗場造構



第22図 NN185 石組造構・NN186 池状造構



第23図 OY 191～197便所跡平・断面図

## IV 検出された遺物

今回の調査で検出された遺物は、KY 1とKY 2の水堀とZP 182とZP 183の両者の流場跡を中心に235点の遺物が検出されている。遺物の大半は、近世に属するものが大半であるが、館を重視することから、ここでは館に関わる資料を中心として説明を加えることにする。遺物の種類より、土器・陶磁器・木器の3に大別される。

### 1) 土器

KY 2の北東側のIトレント内から出土したもので、長頸の土器器蓋が検出されている。細片であることから復元することは不可能であったが、折返し口縁と外面調整を丹念に磨いて調整を加えていることより、塙釜のⅢ期に属するものとみられる。

### 2) 中世期『第24図1~3・5』

KY 1とZP 182から検出されたもので、戸長里窯の小鉢1点と内耳取手土堀片2点の計3点がある。前者の戸長里窯の製品は、これまでに中世に属する14遺跡より出土しており、天正18年頃に伊達政宗によって一時的に築かれた製品と想定されている。出土遺跡を列挙すれば次の通りとなる。

第4表 戸長里窯製品出土遺跡一覧表

\*内耳取手鍋が共伴した遺跡

遺跡名	所在地	出土品名	遺跡の内容
1 東屋敷館	米沢市大字竹井字東屋敷	小鉢	*中世城館跡、建物跡Ⅲ期19棟・近世便所、洗場跡など
2 大浦 C	米沢市中田町字大浦	匣鉢・擂鉢	*奈良建物跡・中世溝・建物跡・近世洗場など
3 一ノ坂	米沢市矢来一丁目	鉢・匣鉢	绳文堅穴住居跡・中世土壙など
4 生蓮寺	米沢市鶴山一丁目	匣鉢	*绳文土壙・中世土壙・柱穴群など
5 大椿	米沢市鶴山四丁目	匣鉢	*绳文堅穴住居跡・土壙・中世～近世溝・墓塚など
6 原田館	米沢市万世町金森字原田	小皿	中世城館跡
7 荒川2	米沢市塩井町塩野字荒川下	匣鉢・擂鉢・小皿	*奈良溝跡・中世城館跡・溝・建物・井戸跡など
8 比丘尼平	米沢市万世町金森字比丘尼平	匣鉢	*古墳方形周溝墓・奈良建物跡・中世～近世溝跡など
9 米沢城東二の丸	米沢市丸の内一丁目	香炉・風呂・溜鉢・擂鉢	*中世建物群Ⅲ期27棟
10 上浅川b	米沢市大字上浅川	匣鉢	*绳文堅穴住居跡・古墳方形周溝墓・奈良建物跡・近世溝跡など
11 温ノ沢橋b	米沢市大字入沢字湯ノ沢橋	匣鉢	绳文前期土壙など
12 我妻館跡	米沢市万世町金森字野中	匣鉢	*中世城館跡、建物跡・土壙など
13 田割館	川西町大字西大塚字堂ノ前	蓋	中世～近世、建物跡・溝跡など
14 植場一	南陽市大字宮崎字植場一	鉢・擂鉢	绳文～近世

東屋敷館跡出土の小鉢は、やや外反する口辺部から垂下する胴部、さらに底部にかけて稜線を境に「く」の字状に底部に向かうのを特徴としている。底部は僅かにヘラ削り手法による、削り高台整形を施している。ヘラ削りは、下胴部の調整にも用いている。

土堀は、内部に3単位の把手を有した置賜地方特有の堀で、上表の大浦C・上浅川b・我妻館など米沢を中心に17の遺跡より検出されている。東屋敷館跡出土の土堀は、口縁部が外反し胴部がまっすぐ垂下する特徴をもつ。

## 第5表 土塙編年表（試案）

分類	想定年代	特徴	主な遺跡名
I 期	14世紀後半～ 15世紀前半	内反気味に強く外反し、胴部はゆるやかにふくらむものと、丸底をなすものとがある。内耳取手は未発達で、存在しないものも含む。	稻荷山館・木和田館
II 期	15世紀中葉～ 15世紀後半	内局気味に外反し、胴部が確かにふくらみ、そのまま垂下するか、斜めに底部に向かうものとある。内耳取手はやや上向きで丸みを呈する。	上浅川b・大浦C・我妻館・北丘尼平・八幡塚古墳・荒川2
III 期	16世紀前半～ 16世紀中葉	口縁の外反が強く、胴部がややふくらむか、斜めに垂下する。内耳取手はやや下向きで「く」の字状をなす。	米沢城東二の丸・大浦C・早坂山C・簞ノ内C・荒川2
IV 期	16世紀後半～ 17世紀前半	口縁部が外反し、胴部がまっすぐ垂下する器形が主流で、斜めに垂下するものもある。内耳取手は口縁部とはほぼ水平を保ち、直角気味に折れる。	「東屋敷館」・米沢城東二の丸・生蓮寺・荒川2・大浦

これまでの中世の遺跡から検出された土塙形態と特徴を分析した大まかな変遷を述べれば第5表のようになる。これまでの土塙で注目されるのが、I期の土塙がまとまって出土した稻荷山館、II期の資料を中心とする大浦C遺跡、III期の土塙を中心にII期の後半～III期の塙を伴う荒川2遺跡である。この分類で示せば、東屋敷館跡の土塙は、IV期に相当することになる。

### 3) 陶磁器『第25図・第26図 第十図版』

KY1・KY2の水堀の覆土及びZP182・ZP183の流場跡を中心に52点出土している。陶磁器の多くは、19世紀後半～20世紀前半の幕末から大正期にかけての印版手法による伊万里系や相馬焼・平清水焼・成島に美濃系の擂鉢が主体であったことから割愛する。その他の主な遺物を紹介すれば、第25図13～18は初期伊万里に属する波佐見地方産の染付碗で、淡い青灰褐色の呉須をもって梅花風の染付を展開しており、全体をねずみ色の灰釉で仕上げている。17世紀後半頃に位置づけられる。第26図19～22は、古伊万里系の皿で18世紀前半、第26図23～26に関しては伊万里系統の18世紀後半から19世紀前半の皿及び碗の仲間である。

### 4) 木器『第24図～第30図』

KY1とKY2を中心に確認された漆器類の他に建物跡の柱穴に伴う柱根が多数含まれる。ここでは、代表的な木器を中心に述べておく。

#### ● 漆器『第24図8～12、第27図30・31 第十一図版』

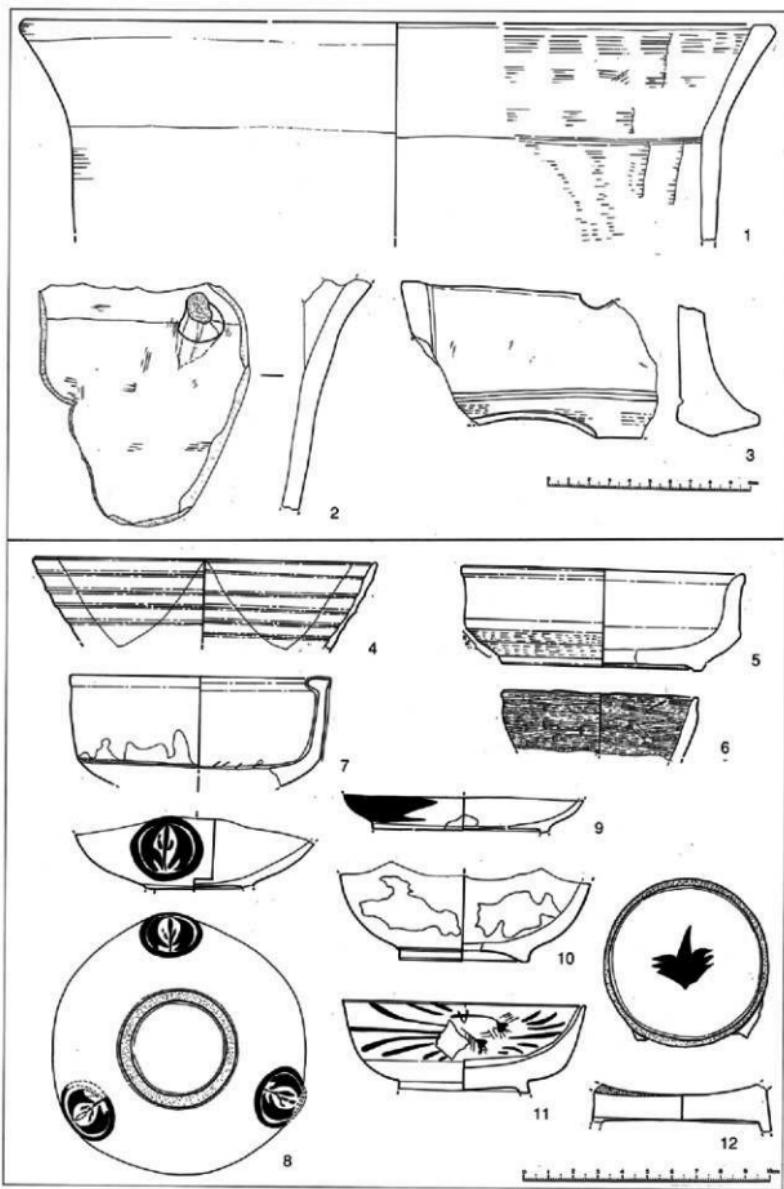
椀5点と鞍1点の計6点が検出されている。前者の漆器は、内外面を丁重に重塗施したもので家紋3单位を有した8、細線を花火状に配した11、底部に橋状の文様を描いた12と不明のもの9・10で、特に11・12の両者は上浅川遺跡より検出され、II器の土鍋と共に出土している。

#### ● 鞍『第27図32 第十一図版』

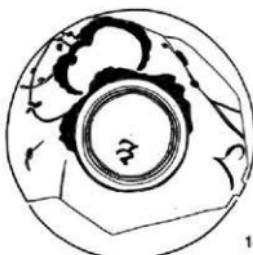
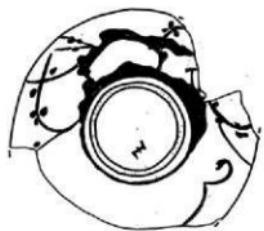
KY1の底面より検出されたもので、鞍の居木の部分である。一部、欠損しているが麻布を張り漆を塗って仕上げた「漆塗鞍」もので、現長が32.5cm、幅10cm、厚さ2.8cmを測る。鞍に装着する居木は、時代によってその形態が異なるが、出土した居木に関しては左右一対で構成する形態である。

#### ● 柱根『第28図～第30図 第十二・十三図版』

全て建物跡と想定される柱に使用されたもので、52本が検出されている。検出した柱の多くは

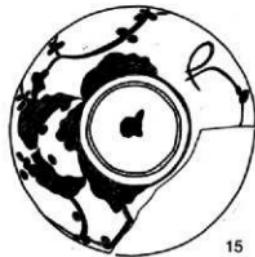
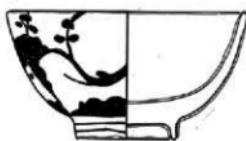
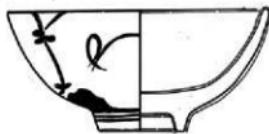


第24図 出土遺物(1)



13

14



15

16

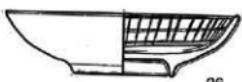
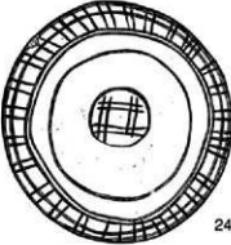
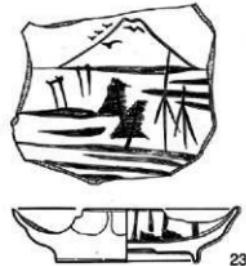
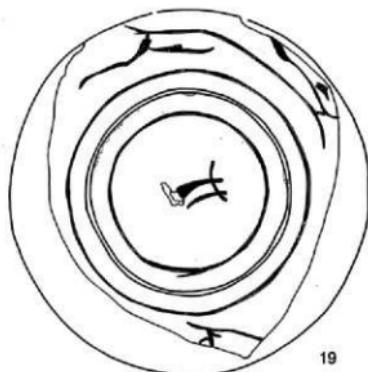
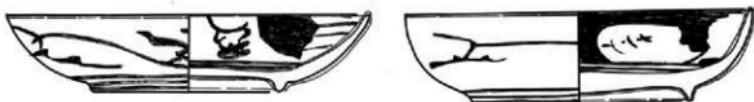


17

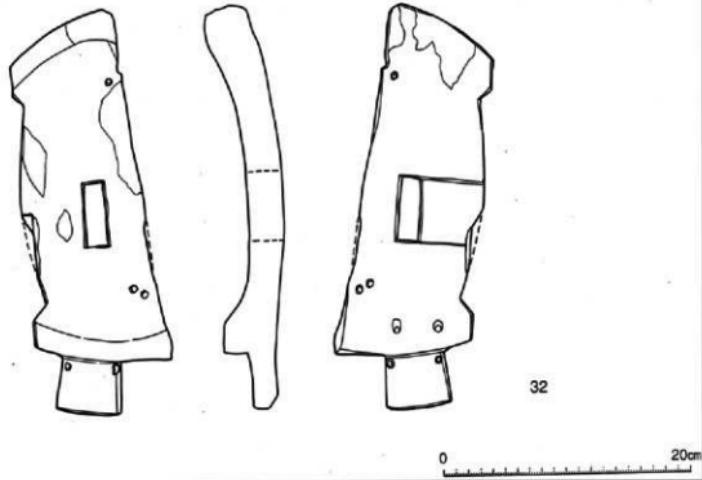
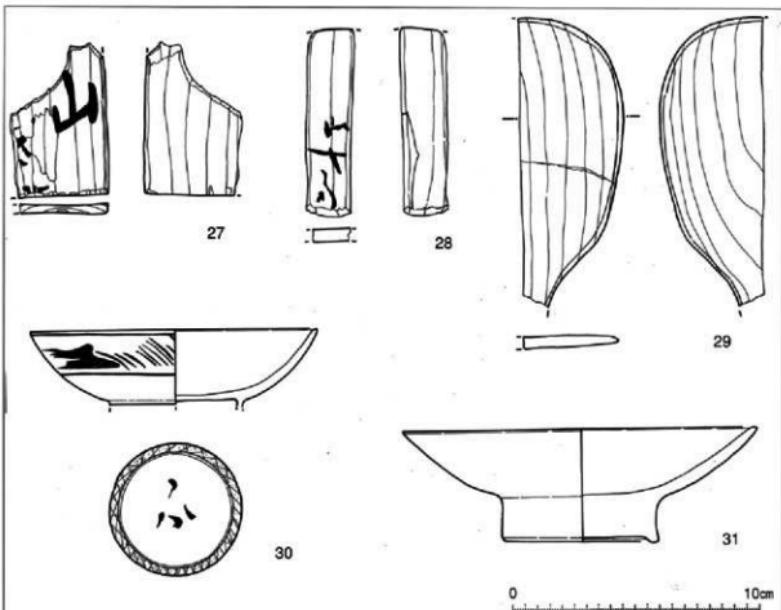
18



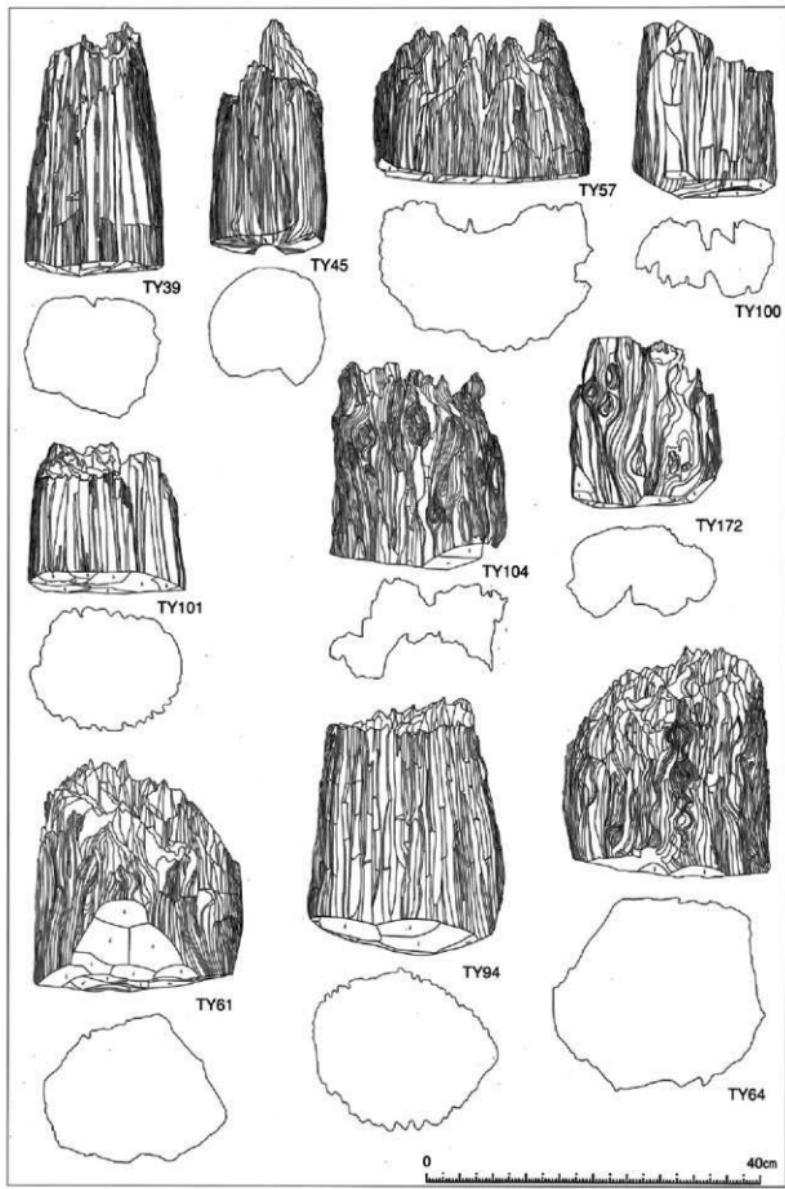
第25図 出土遺物(2)



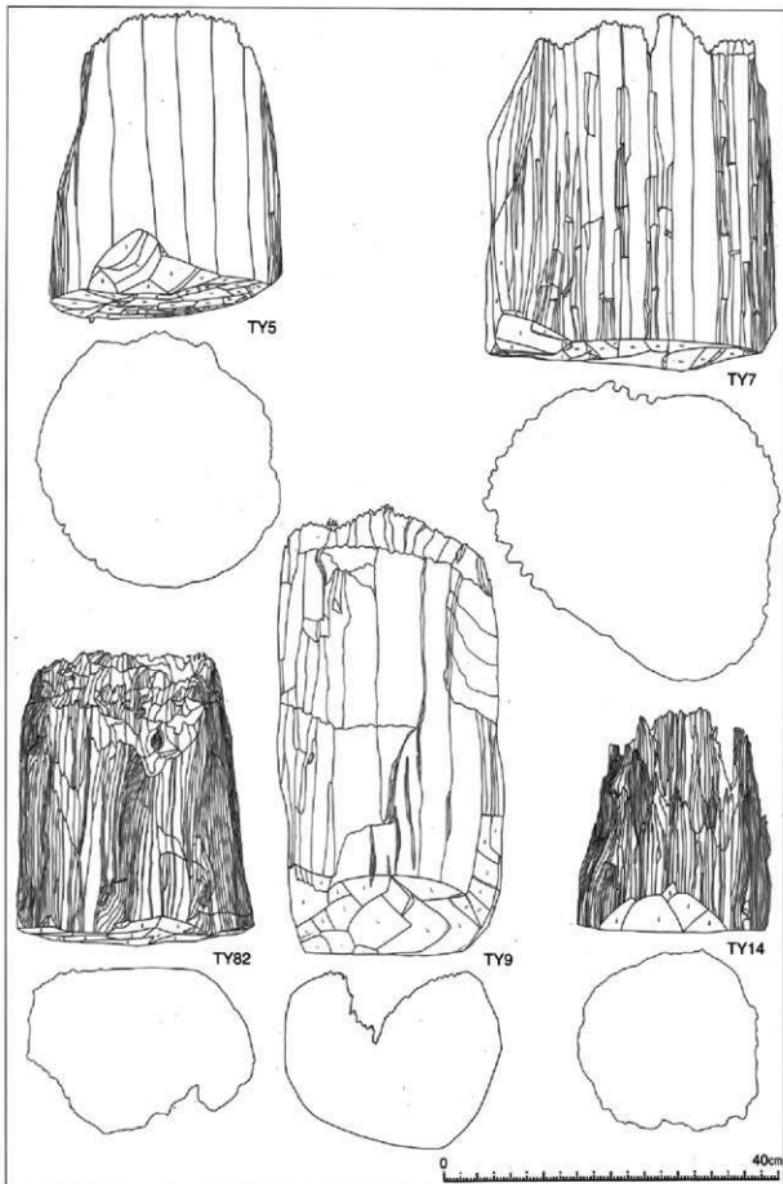
第26図 出土遺物(3)



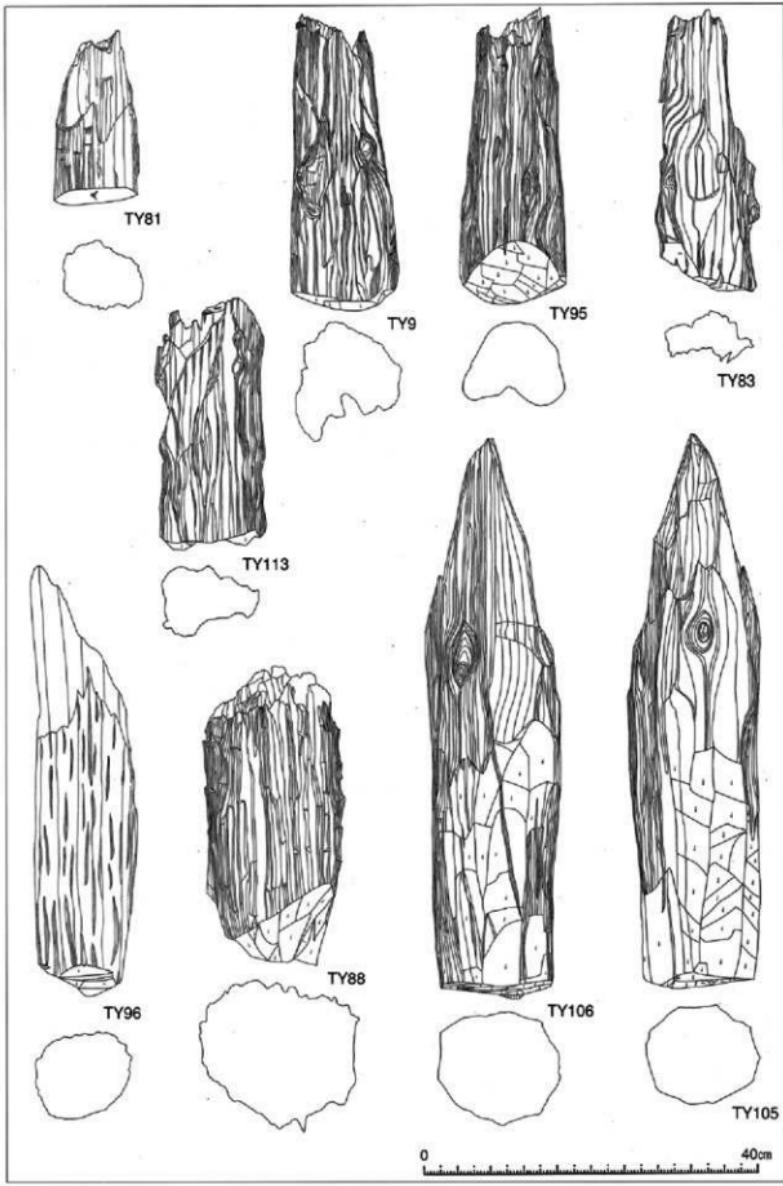
第27図 出土遺物(4)



第28図 出土遺物(5)



第29図 出土遺物(5)



第30図 出土遺物(7)

栗材を使用したものが中心であるが、他に杉材やクヌギ・ハンノキなどの比較的軟弱な材料を用いたものも含まれる。柱の太さは最大で40cmを有するが、平均25cm前後が多く見られた。

柱の切断状況と形態から次のA～C類に区分しておく。

#### A類

A類は、比較的太い柱に認められ、柱の底辺部のみに削りを施しているもので、第28図TY39・45・57・64・94・100・101・104、第29図TY14・82、第30図TY9・81・96・113などがある。

#### B類

B類は、柱根の太さに係わりなく、全体的に認められるもので、柱の底辺部から上部20cm程度まで削りを施し、柱根の太さを調整しているもので、第28図TY61・172、第29図TY5・7・9、第30図TY83・88などがある。

#### C類

C類は、比較的細い柱根（約20cm未満）に認められるもので、柱の底辺部から上部に30cm以上削りを施しているもので、第30図TY105・106などがある。

## V ま と め

今回の東屋敷館跡の調査では、台形を示す平地式の平城であることが判った。館跡は、水堀と土塁で区画したもので、南に虎口を有した概ね半町四方の規模をなす。堀は箱堀の形態をなし、Ⅲ期の建物を建替えした段階で堀の一部が埋め戻され、南側と東側に拡張することによって、3分の2町四方に拡大した。建物群はⅠ期～Ⅲ期の3回の建替えを行っている。

I期では、BY1とした大型の母屋を中心にして、後建物と東建物群2棟に櫓を含めた5棟で構成するものが、II期に入ると西側にも建物1棟を配置し、6棟で構成する。最後のIII期は最も発展した時期で、母屋1棟、後建物1棟、東西左右の建物群各3棟と均整のとれた配置関係が明確になっている。注目されるのは、母屋と後建物と母屋の皮下が市に接する建物である。この3棟の建物は、規模や形態が建替えによって異なってくるもののI期～III期のいずれも、同じ場所に構築されている。このことは、館全体の施設配置における位置的な存在に退位し、重要な施設であったものと考えられる。母屋は別にして、後建物は蔵、東建物は食料倉などが想定される。

さて、東屋敷館の形態を東南置賜地方の平城で分類すれば、手塚1995の試案した分類によると、初期形態は木和田1型に類似し、拡張形態は、三月在家型に近いものといえる。しかし、木和田1型の基本は山寄せ型であることからいえば、初期形態も含め変形の玉館型の範疇に加わるものと考えられる。

出土遺物は極めて少なく、館跡に直接結びつける遺物は土堀と漆器のみであった。従って館の時期を決定することは困難であるが、あえてつけ加えれば、土堀はI期の土堀の特徴を示している。漆器の椀の染め付けの一部に上浅川b遺跡のKY1下層出土の漆器と共通している。上浅川b遺跡出土の漆器と共に土堀はII期の土堀であった。

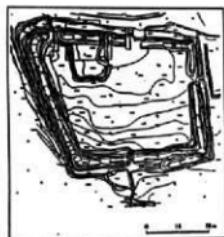
このことを前提に大胆に年代を仮説すると 15 世紀の後半から 16 世紀の後半の時期の範疇内に館跡が共存したことになり、後の館編年（玉館型）とも符合する。

さらに、館の所有者の特定は伝承や記録のない状況では不可能に近い。しかし、東屋敷の西方 500 mには、伊達輝宗と政宗の重臣の一人、茂庭氏（良直・直綱）の館と推測される川井館に隣接していることを重視しなければならない。直接、結びつけることは危険であるが、鞍の存在は、当時、限られた人物のみが装着（馬の使用）を許されていたことを考える時、茂庭氏に密接に係りをもつ人物像の可能性を強くする。

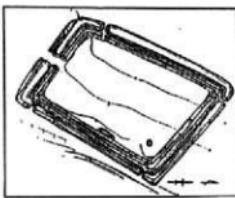
今まで県内で遺跡から鞍が検出された例は、山形市鷗遺跡（古墳後期）が唯一であり、今回の発見が 2 例目となるものである。

#### 参考文献

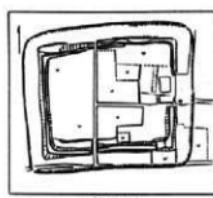
- 1986 上浅川遺跡第 3 次発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第 15 集
- 1992 大浦 C 遺跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第 33 集
- 1994 米沢城東二の丸跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第 44 集
- 1995 我妻館跡発掘調査報告書 米沢市埋蔵文化財調査報告書第 50 集
- 1995 山形県中世城館遺跡調査報告書第 1 集（置賜地域）



木和田1型



木和田2型



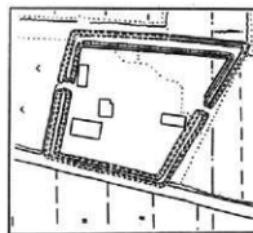
押山型



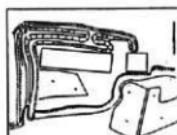
中川原型



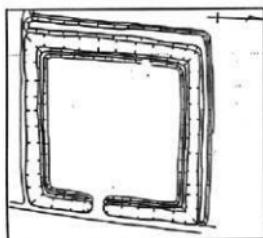
福荷山型



三月在家型



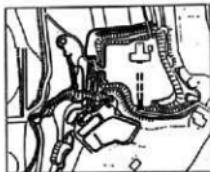
森合型



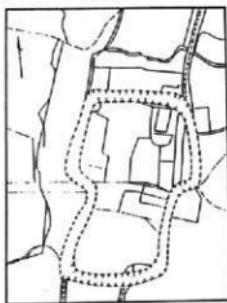
玉館型



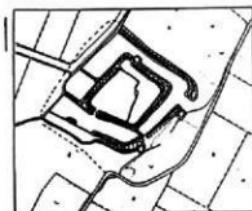
我妻型



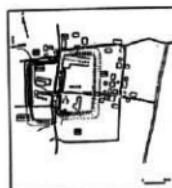
成島型



蒲生田型

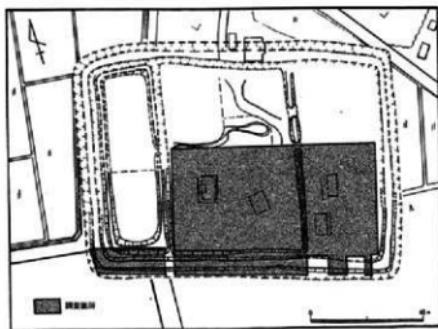


原田型

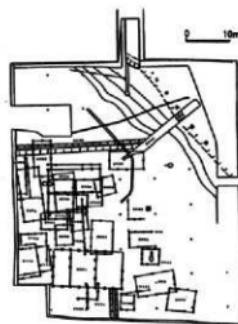


萩生型

第31図 中世平城形態分類図



1 我妻館



2 米沢城東二の丸跡



3 上浅川 b 遺跡



4 荒川 2 遺跡

第32図 主要平城調査平面図

第6表 置賀盆地の城館址縦年表

1995 手塚 孝

編年 年代	第Ⅰ段階 12世紀	第Ⅱ段階 13世紀	第Ⅲ段階 14世紀前半	第Ⅳ段階 14世紀後半	第Ⅴ段階 15世紀前半	第Ⅵ段階 15世紀中葉	第Ⅶ段階 15世紀後半	第Ⅷ段階 16世紀前半	第Ⅸ段階 16世紀中葉	第Ⅹ段階 16世紀後半
東南置賀の城館 山城					万世鶴山型	早坂山館	女離型 高安型 小屋型 櫛後型	高島志田型 中ノ在室型 居代型	鷺城型 赤松山型 前の在室型 米沢羽山型 熊野山型	二色模型 大洞型 三沢型 龜岡型 中野森型 北沢型
	本和田1型	木和田2型 (成島型) 稻荷山1型	桙山型 種荷山2型	中川原型 三月在家型	我妻館	米沢城二の丸 玉館型	蒲生田型	草田型	幕生型	秦海山型

# 写 真 図 版

第一図版 東屋敷館跡



▲ KY1 堀跡・土塁Aトレンチ（東から）



▲ KY1 堀跡・土塁Aトレンチ（西から）

第二図版  
東屋敷館跡



▲ Aトレンチ東側土塁（南から）



▲ Aトレンチ西側土塁（南西から）



▲ KY 1 堀跡（南東から）



▲ KY 1 堀跡（東から）



▲ KY1 塚跡（南から）

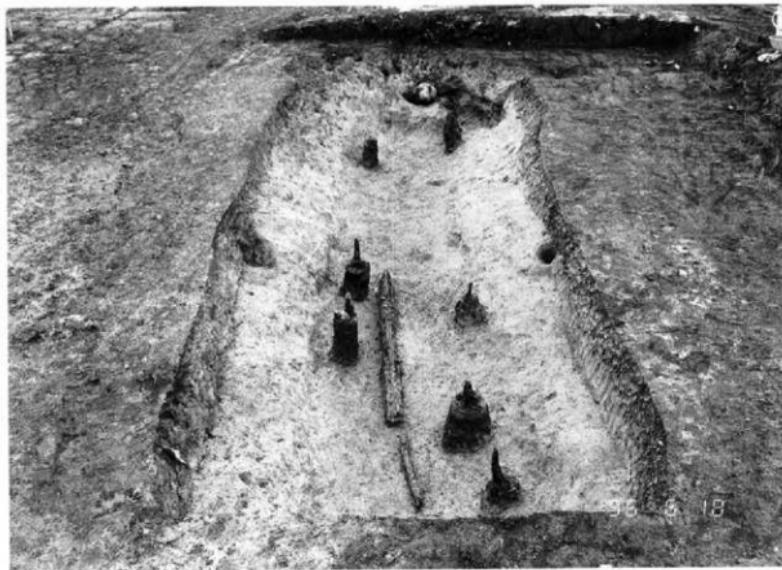


▲ KY1 塚跡（東から）

第五図版 東屋敷館跡



▲ BY 2 堀立建物跡（南から）



▲ KY 2 堀跡（西から）



▲ BY 5 堀立建物跡（南から）

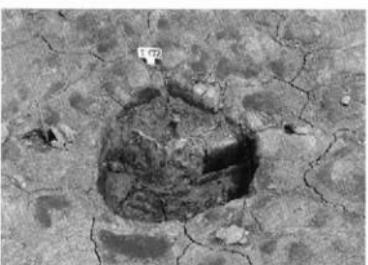


▲ BY 17 堀立建物跡（南から）

第七図版 東屋敷館柱穴群(1)



第八図版  
東屋敷館柱穴群  
(2)



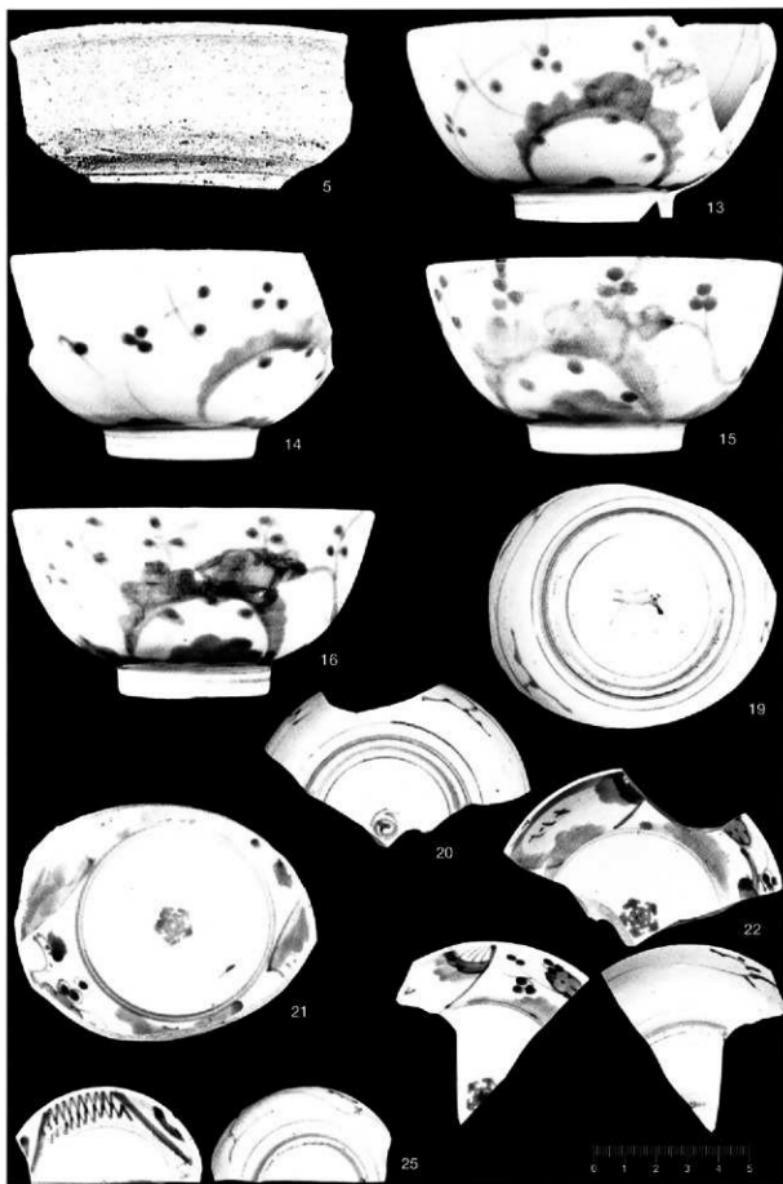


▲ 錆入式風景（北西から）

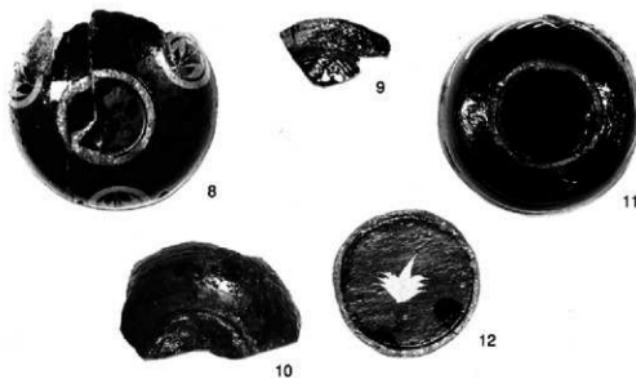


▲ 調査風景 K Y 1 堀跡（南から）

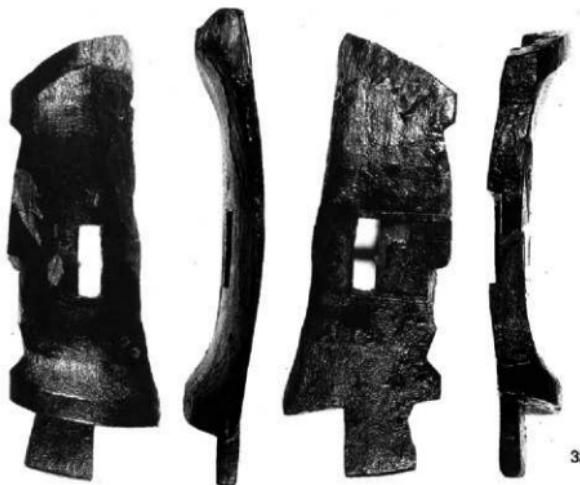
第十圖版  
出土遺物(1)



第十一図版 出土遺物(2)

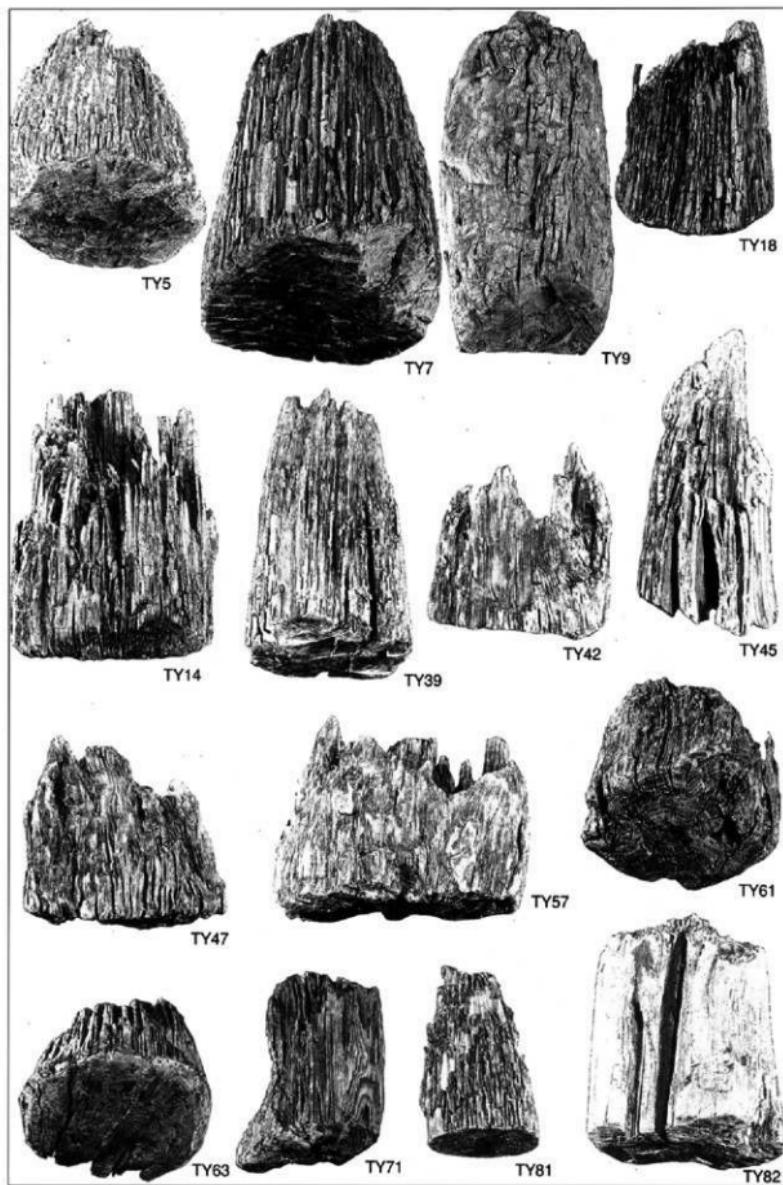


0 1 2 3 4 5



0 1 2 3 4 5

第十二図版  
出土遺物(3)



第十三図版 出土遺物(4)

